

Ⅲ—1 国語科

特定の課題に対する調査 教科等別結果の分析と考察

1 【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した調査企画の全体像

校種	小学校		
学年	第3学年	第4学年	第5学年
出題範囲	小学校第1・2学年	小学校第3・4学年	

A 話す・聞くこと	エ	大事なことを落とさない	エ	中心に気を付けて聞き、質問・感想
		・B【話聞】1-1 ・B【話聞】1-2		・B【話聞】1-1 ・B【話聞】1-2

B 書くこと	イ	構成：事柄の順序 ・B【書】5-1	イ	構成：段落の役割 ・B【書】5-1
	エ	推敲：間違いに気付き直す ・A【書】5-2	オ	推敲：間違いを正し、よりよい表現に ・A【書】5-2
	オ	交流：よいところ見付け感想 ・S【書】5-3	カ	交流：考えの明確さについて意見 ・S【書】5-3

C 読むこと	イ	時間・事柄の順序 ・C【読】(説)3-1	イ	内容の中心となる語・文 ・C【読】(説)3-1
		内容の大体 ・B【読】(説)3-2		段落相互の関係 ・B【読】(説)3-3 事実と意見の関係、 ・B【読】(説)3-2
	ウ	人物の行動、想像を広げ ・C【読】(文)4-1 ・B【読】(文)4-2	ウ	場面の移り変わり ・C【読】(文)4-1 登場人物の性格を想像 ・B【読】(文)4-2 登場人物の気持ちの変化を想像 ・A【読】(文)4-3
		大事な言葉・文を書抜 ・A【読】(説)3-3 ・A【読】(文)4-3		要点・細かい点・引用・要約：人物や情景の描写 ・A【読】(説)3-4 ・A【読】(文)4-4
	オ	経験と結び付いた思いや考え ・S【読】(説)3-4 ・S【読】(文)4-4	オ	自分の考えをもつ ・S【読】(説)3-5 ・S【読】(文)4-5

伝統的な言語文化と 国語の特質に関する事項	イ	(ウ)意味によるまとまり ・C【言】2-1	イ	(ウ)性質・役割による類別 ・C【言】2-1
		(カ)主語・述語の関係の理解 ・C【言】2-2		(キ)修飾語・被修飾語の関係 ・C【言】2-2
		(オ)文の意味に沿う句読点 ・C【言】2-3		(カ)辞書の利用 ・C【言】2-3

※S～C：設問レベル、【話聞】話す・聞く能力 【書】書く能力、【読】読む能力
【言】言語についての知識・理解・技能、番号：設問番号、(説)説明的文章、(文)文学的文章

小学校		中学校	
第6学年	第1学年	第2学年	第3学年
小学校第5・6学年		中学校第1学年	中学校第2学年

エ	話し手の意図を捉え、自分の意見と比較	エ	質問、共通点・相違点の整理	エ	論理構成・自分と比較
	・B【話聞】1-1 ・A【話聞】1-2		・B【話聞】1-1 ・A【話聞】1-2		・B【話聞】1-1 ・A【話聞】1-2

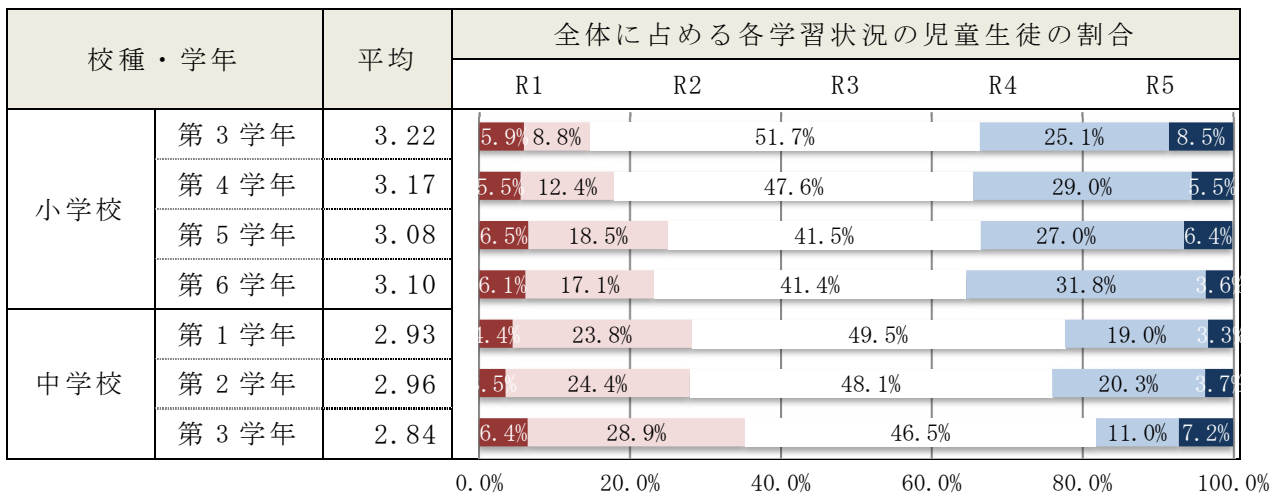
イ	構成：考えを明確にする文章全体の構成	イ	構成：段落の役割	イ	構成：立場、事実や事柄明確に
	・B【書】5-1		・B【書】5-1		・B【書】5-1
オ	推敲：表現の効果	エ	推敲：表記や語句の用法、叙述	エ	推敲：語句、文、段落相互の関係
	・A【書】5-2		・A【書】5-2		・A【書】5-2
カ	交流：表現の仕方に着目して助言	オ	交流：題材、材料、根拠の意見	オ	交流：意見、助言、考えを広げる
	・S【書】5-3		・S【書】5-3		・S【書】5-3

ウ	内容を的確に押さえ要旨を捉える	イ	文脈上の語句の意味	ア	抽象的な概念・心情を表す語句
	・C【読】(説)3-1 ・B【読】(説)3-3		・C【読】(説)3-1		・C【読】(説)3-1
エ	事実と意見、感想の関係	ウ	中心・付加的な部分の読み分け要約	イ	文章全体と部分の関係
	・B【読】(説)3-2		・B【読】(説)3-2		・B【読】(説)3-2
エ	考えを明確にする	ウ	要旨を捉える	イ	人物の言動の意味
	・S【読】(説)3-5		・B【読】(説)3-3		・C【読】(文)4-1 ・B【読】(文)4-2
エ	人物の相互関係、心情を捉える	ウ	場面の展開、人物の描写	イ	例示や描写の効果
	・C【読】(文)4-1 ・B【読】(文)4-2 ・B【読】(文)4-3		・C【読】(文)4-1 ・B【読】(文)4-2		・B【読】(説)3-3
オ	優れた叙述について考えをまとめる	エ	文章構成・展開、表現の特徴	ウ	構成や展開、表現の仕方について根拠を明確に
	・S【読】(文)4-5		・S【読】(説)3-5 ・S【読】(文)4-4		・S【読】(説)3-5 ・S【読】(文)4-4
オ	考えを広げ、深める	オ	ものの見方・考え方を広げる	エ	見方・考え方の知識・体験関連付け
	・A【読】(説)3-4 ・A【読】(文)4-4		・A【読】(説)3-4 ・A【読】(文)4-3		・A【読】(説)3-4 ・A【読】(文)4-3

イ	(キ)文や文章の構成	イ	(ア)音声の響き・仕組み	イ	(イ)同音異義語、多義的意味
	・C【言】2-2		・C【言】2-1		・C【言】2-1
ウ	(ク)敬語の使い方	イ	(エ)単語の類別	イ	(エ)単語の活用
	・C【言】2-3		・C【言】2-2		・C【言】2-2
ウ	(カ)漢字の由来、特質	ウ		ウ	
	・C【言】2-1				

2 結果の分析と考察

(1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)(再掲)



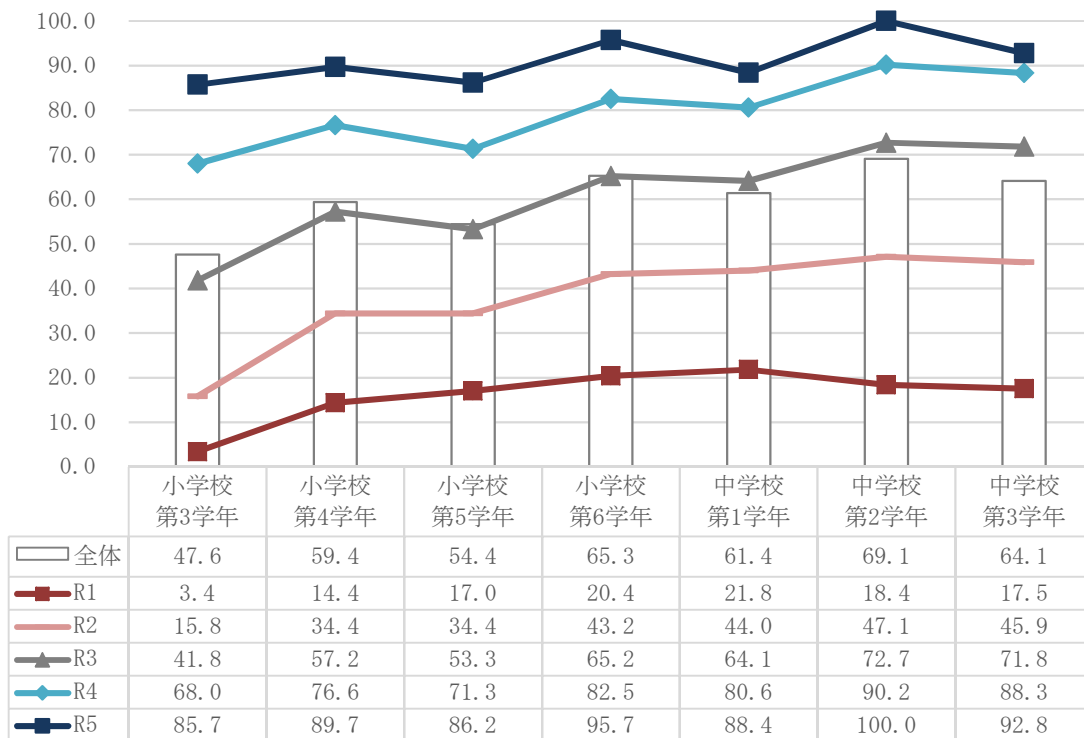
※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分な定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)

R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科全体)(再掲)



〔学力段階に関する考察〕

- 「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」の目標 I に準拠すると、中学校第 3 学年における R3 以上の割合はおよそ 65% であり、平成 33 年度の目標値 80% からは 15 ポイント低い状況である。R3 以上の割合は、平成 27 年で 54%、28 年度で 63% と目標に近づいてきている。
- 学年別にみると、小学校第 3 学年から中学校第 3 学年まで学年進行に伴い R1・2 の全体に占める割合が増加している。つまり、学び残しを解消する機会がないままに学年が進み、中学校第 3 学年では 35% の生徒が何らかのつまずき、学び残しを抱えている状態となっている。一方、R4・5 も学年進行にしたがい、割合が減少している。特に R4 は小学校第 6 学年と比べて中学校第 1 学年で 13% 減少し、中学校第 3 学年でまた 9% 減少する。R3 の増減はあまりみられない。
- ◎（概括 1）学年進行に伴うつまずき、学び残しを累積させないためには、全ての児童・生徒に各々の学力・学習状況に応じた指導が必要であることを前提としながらも、R1・2 への重点的な基本的な技能に関する個別指導・支援が必要である。また、学習指導要領に示される指導目標・内容の【系統性】を構造的かつ明確に理解し、単位時間における課題解決学習の定着を図る。その際、学力段階と意識・実態調査の結果を関連付け、児童・生徒一人ひとりを取り巻く環境や意識も十分に把握したうえで、学力向上のための手だてを考える必要がある。また、言語活動の【連続性】を十分に確保した指導により、各学年での積み上げを確実に行う必要がある。
- ◎（概括 2）R1・2 の増加と R4・5 の減少傾向にある学習状況は、児童・生徒同士の学び合いを生かし交流を活性化させることで改善を図る。また、【協働】を通じて教育内容と教育環境の充実に努め、児童・生徒の主体的な学びを確保していく必要もある。

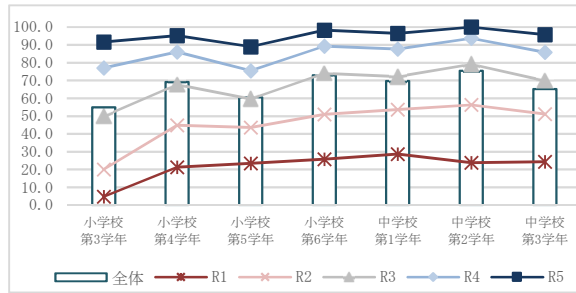
〔教科全体の学力段階ごとの平均正答率に関する考察〕

- ◎（概括 1）R5 の中学校第 1 学年を除き、学年進行にしたがい、R1 から 5 まで、どの段階も平均正答率が上昇している。特に R2 と 3 がどちらも 30 ポイント以上高くなっている。R1 から R3 までの児童・生徒も学年が上がるにしたがって着実に伸びている。また、中学校第 1 学年で正答率が 88% となっている R5 の正答率も、中学校第 2 学年では 100% である。一方、中学校第 1 学年では R1 と R5 の差が 67 ポイントだが、中学校第 3 学年では 75 ポイントと、正答率の差が大きくなっている。これは、R1 が中学校第 1 学年以降伸びていないことに起因する。つまずきや学び残しは学年進行に伴い累積していく。当該学年の基礎的・基本的な指導事項を確実に身に付けさせる指導の改善が急務である。主体的・対話的に活動する授業を構築する中で、つまずきや学び残しを解消し、新たに累積させない指導が必要である。
- ◎（概括 2）授業の中では、児童・生徒の問いを大切にした課題設定を行うことで主体的な学びを促し、ペアやグループ学習など協働的な学習を取り入れ、一人ひとりの学習活動を保証する必要がある。また、対話によって深い学びを追究することは、R2 や 3 をはじめ、全ての児童・生徒が活躍する手だてとなる。

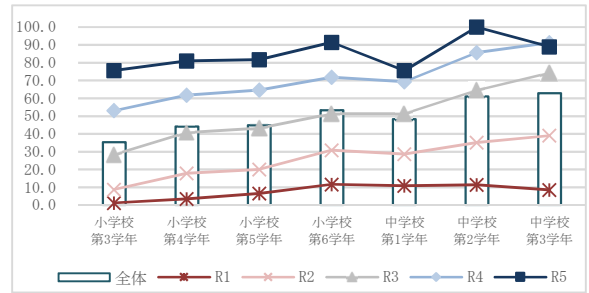
(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の学力段階ごとの平均正答率

ア 基礎・活用別

① 基礎

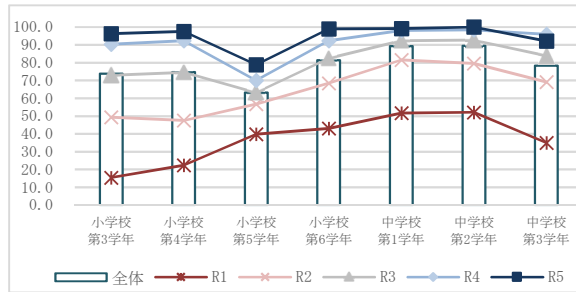


② 活用

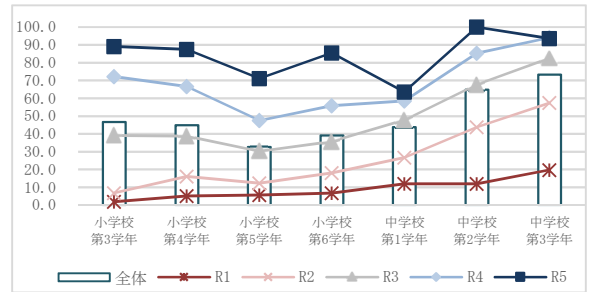


イ 観点別

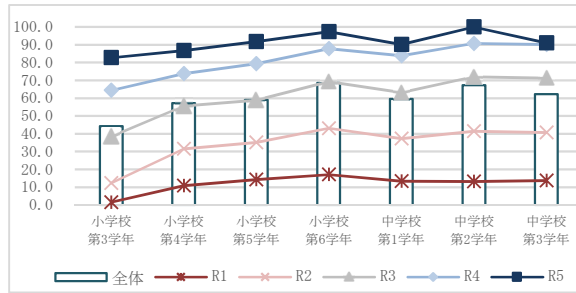
① 話す・聞く能力



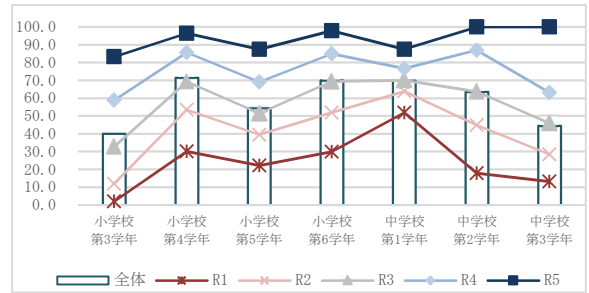
② 書く能力



③ 読む能力

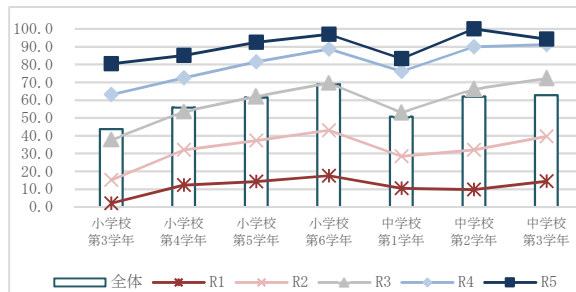


④ 言語についての知識・理解・技能

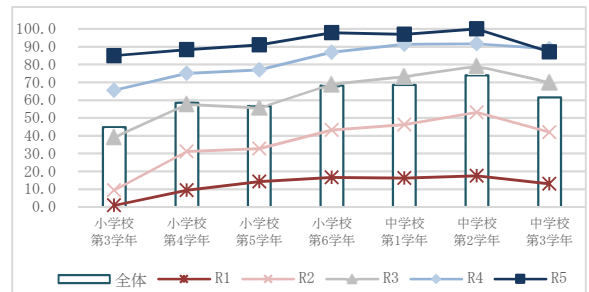


ウ 領域別

① 説明的な文章



② 文学的な文章



〔基礎・活用別の学力段階ごとの平均正答率に関する考察〕

- 「基礎」においては、R1・2ともに、正答率が学年進行に伴って緩やかに上昇する傾向にある。特に小学校第3学年から第4学年へかけての伸びが大きく、R1・2への手だての効果が表れてきたと考えられる。正答率を他学年と比べると小学校第3学年と小学校第5学年が低い。第3学年は主にR1・2の児童の正答率が、第5学年は主にR3以上の正答率が反映している。R3以上の正答率が低い理由として設問の難易度の影響も考えられるが、知識・技能の確実な定着に課題があると思われる。
- 「活用」については、中学校第1学年の正答率が特に低い。これは「書く能力」観点の「推敲」の通過率が0.5%と極端に低かったことが反映している。その原因を細かに分析し、これからの設問の仕方や指導方法に生かしていく必要がある。

〔観点別の学力段階ごとの平均正答率に関する考察〕

- 「書く能力」に関する課題は依然大きく、7学年中5学年で正答率が最も低い。全体の正答率は、学年進行にしたがって上昇していつている。R1と2の差に関しては、小学校第3学年で5ポイントであったものが、徐々に開いていき、中学校第3学年で38ポイントになる。小学校第3学年と中学校第3学年の正答率の差を比べると、R1の差は14.1ポイントに対して、R2の差は50.5ポイントと大きく伸びている。
- 「話す・聞く能力」については、他観点能力と比較して正答率が高い。背景にR1の正答率が37%と高いことが挙げられる。
- 「読む能力」では、R1と5の差が、全学年を通し、他観点と比べて大きい。
- 「言語についての知識・理解・技能」については、当該観点到に含まれる設問レベルは全て基礎Cであり、全ての児童・生徒に確実に習得させる必要のある＝通過率100%を目標とする。この基準に照らすと、最も大きな課題を残している。

〔領域別の学力段階ごとの平均正答率に関する考察〕

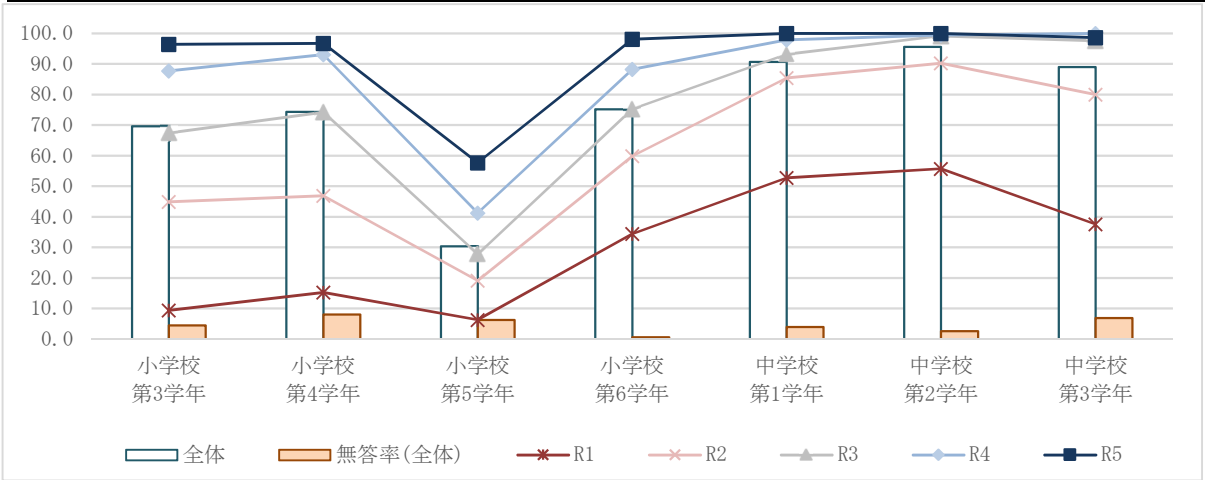
- 設問レベル・難易度が完全に同一ではないため慎重に考察する必要があるものの、例年「文学的な文章」の平均正答率と比較し、「説明的な文章」のそれが低い傾向にあった。今年度は、「文学的文章」と「説明的文章」の平均正答率の差は4ポイントであり、「説明的文章」の正答率の方が高い学年が3学年と、その差はほとんどない。「説明的文章」の指導において、指導内容の【系統性】を構造的に理解したつながりのある指導が行われ、その効果が表れてきていると考えられる。
- ◎（概括1）上記は、正答率を主たる材料としており、また同個体の経年変化に基づく考察ではない。よって、正答率の微細な変化や差をもって実態とすることは避けるべきである。学力・学習状況には、経済や社会関係、文化といった資本も影響している。
- ◎（概括2）以下の3点は、改善方策を重点的に考える必要がある。①「書く能力」が他観点と比較して低い傾向②「読む能力」でのR1と2の段階差が大きい傾向③中学校での「書く能力」のR1と2の段階差が、学年が進むにつれて大きくなる傾向。

(4) 領域別に抽出した設問の(準)通過率・無答率

ア 聞く・話すこと(聞くことの系統)

① 「聞くこと」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

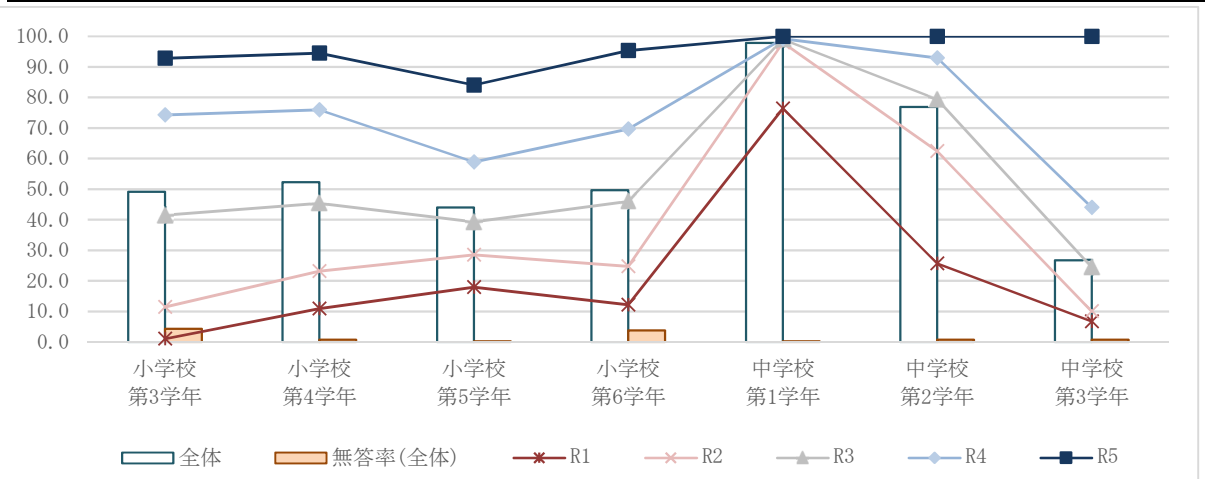
校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 B	1-2	エ 話し手が知らせたいことを聞き取る。
	第4学年	基礎 B	1-2	エ 話の内容を聞いて質問する。
	第5学年			
	第6学年	活用 A	1-2	エ 話し手の意図を自分の意見と比べるなどして考えをまとめる。
中学校	第1学年	活用 A	1-2	エ 話し手の意見を踏まえて考えを書く。
	第2学年	活用 A	1-2	エ 話し手の意見に触れ理由を明確にして考えを書く。
	第3学年	活用 A	1-2	エ 話し手の意見に触れ理由を明確にして考えを書く。



イ 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(言葉の特徴や決まり)

② 「語句・言葉」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 C	2-2	カ 文中から主語と述語を押さえる。
	第4学年	基礎 C	2-2	キ 文中の語句を修飾している語を捉える。
	第5学年			
	第6学年	基礎 C	2-2	キ 重文を単文に分ける。 複文を単文に分ける。
中学校	第1学年	基礎 C	2-2	エ 自立語と付属語に分類する。
	第2学年	基礎 C	2-2	エ 活用する自立語・付属語を押さえ単語を分類する。
	第3学年	基礎 C	2-2	エ 活用する自立語・付属語を押さえ単語を分類する。



〔「聞くこと」に関する設問の考察〕

小学校第4学年の趣旨と5学年の趣旨は「話の内容を聞いて質問する」で同じであるが、通過率は74.3%・30.3%と学年間の差が大きい。その理由として、第4学年は「くわしく知りたいことを質問しましょう」との言葉が設問文にあることによって、質問することが求められていることが理解できるのに対し、第5学年は「分からなかった点や確かめたい点を一つ書きましょう」と書かれているために、何が求められているのかがよく理解できなかつたことが考えられる。設問文の曖昧さはあってはならないが、文意がつかめなくて答えられないことは日常の学習でよくみられる。そのために、言葉の意味を正確に理解するだけでなく、何を問われているのか文の意図を読み取る理解力も必要となる。また、国語科における「用語」の指導も丁寧に行い、一貫した連続的な指導が必要である。「用語」を理解するだけでなく、「用語」を使って文を書いたり話したりする機会を増やすことも効果的である。

小学校第6学年・中学校第1学年は、「話し手の意見と比べて自分の考えを書く」中学校第2学年では「相手の意見を踏まえて書く」「中学校第3学年は相手の意見に触れるだけでなく、考えに理由を添えて自分の考えを書く」という系統性を踏まえた設問である。それぞれの通過率が、75.2%、90.7%、95.6%、89.0%と学年が上がるにつれて徐々に高くなっている。また各段階層の差も大きくなっている。R1・2も他観点の設問に比べて通過率が高い。「話を聞いて自分の考えを書く」学習が定着してきており、日常の指導の成果が表れていると考えられる。

〔「語句・言葉」に関する設問の考察〕

中学校第2・3学年は単語の類別を問う設問で、それ以外の学年は文中の主語と述語、修飾語と被修飾語の関係を問う設問、あるいは主語と述語が分かれば解答できる設問であり、全ての児童・生徒に確実な習得を目指す基礎Cのレベルである。

通過率は、文中から主語と述語を押さえる小学校第3学年が49.1%、修飾と被修飾の関係を捉える小学校第4・5学年が52.3%、44.1%であることは大きな課題である。文中の主語と述語との関係、修飾と被修飾の関係を捉えられなければ文や文章を正しく理解できない。文章を読む時は細かい点にとらわれず、「だれが、どうした」「何がどうなった」のか、内容の大体をつかむ読み方の指導を不断に行う必要がある。

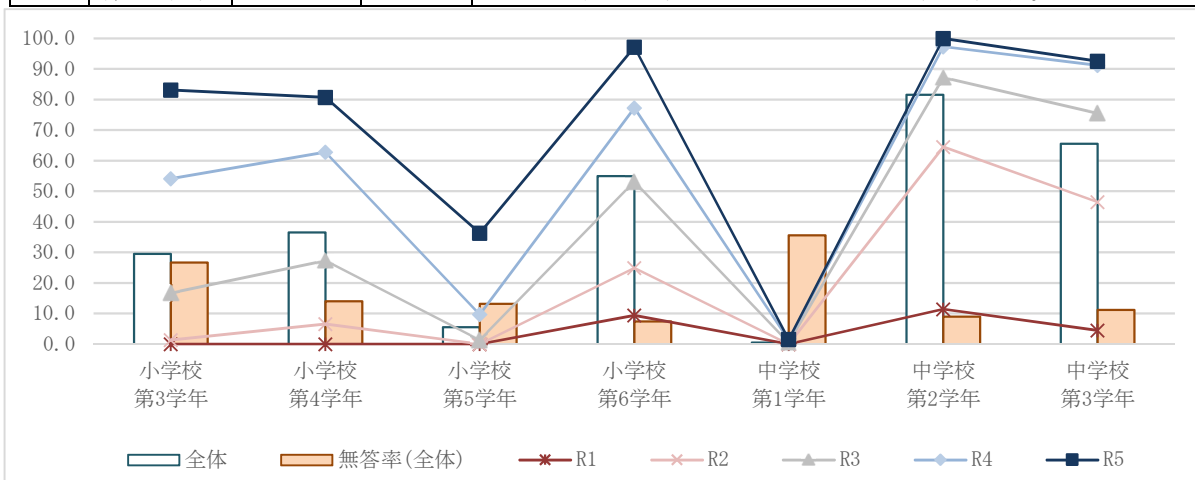
中学校第3学年は文中の「形容動詞、助動詞、動詞」の品詞を問うており、通過率は26.7%である。特に形容動詞や助動詞など日常の学習にあまり使われないことと相まって学習の定着が図られていないことが分かる。

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）においても「小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質がある」と指摘されるように、語彙力は言語能力を支える重要な要素である。思考力を高め、表現力を豊かにするためにも語彙指導の改善・充実を図ることが重要である。

ウ 書くこと(推敲、交流の系統)

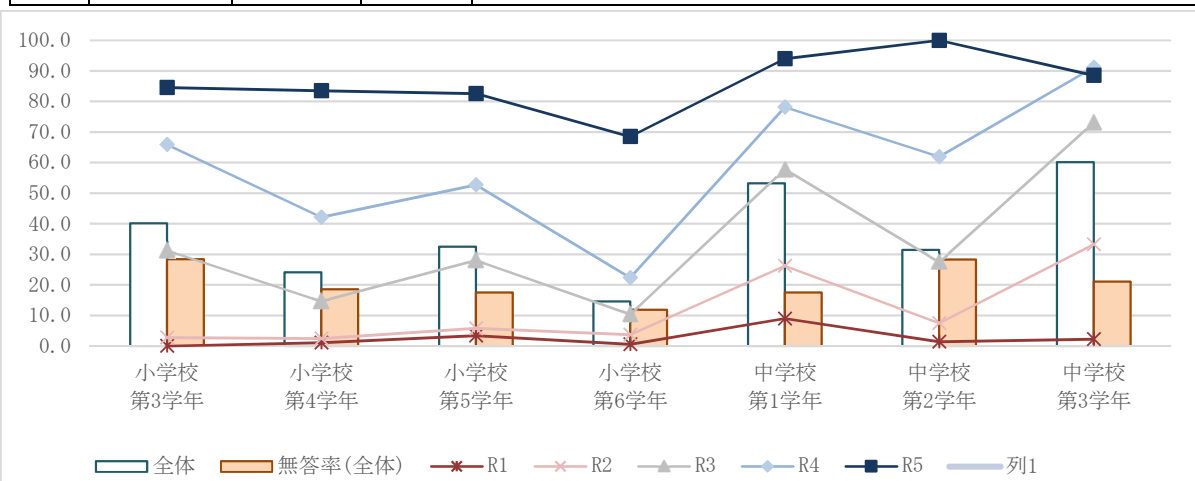
①「推敲」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	活用A	5-2	エ 間違いなどに気付き直す。
	第4学年	活用A	5-2	オ 文章の間違いを正しく直す。
	第5学年			オ 文章をよりよい表現に書き直す。
	第6学年	活用A	5-2	オ 表現の曖昧さを確かめて書き直す。
中学校	第1学年	活用A	5-2	オ よりよい言葉や文に書き直す。
	第2学年	活用A	5-2	エ 叙述の仕方について適切に書き直す。
	第3学年	活用A	5-2	エ 段落相互の関係を考えて適切に書き直す。



②「交流」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	活用S	5-3	オ 分かりやすい書き方とそう思った理由を書く。
	第4学年	活用S	5-3	カ 考えを明確に伝えるための書き方に気付く。
	第5学年			カ 助言された内容を参考にして書き直す。
	第6学年	活用S	5-3	カ 助言された内容を参考にして書き換える。
中学校	第1学年	活用S	5-3	オ 助言する内容と助言する根拠を書く。
	第2学年	活用S	5-3	オ 助言する内容と助言する理由を書く。
	第3学年	活用S	5-3	オ 助言する内容と助言する理由を書く。



〔「推敲」に関する設問の考察〕

間違いを正したり、よりよい文に書き直したりすることを趣旨とする推敲の設問で活用 A レベルである。小学校第 5 学年の通過率が 5.5% と極端に低い。「ぼくが考えたのは、～と考えました。」の「考えた」の重複を解消して一つに正す設問である。低い理由として設問の意図が理解できなかったことが考えられる。小学校第 4・6 学年は「正しく書き直す」「正しい文になるように」というように指示されているが、小学校第 5 学年は「よりよい文に直したいと思います。正しく書き直しましょう」と書かれているために、「よりよい文」と「正しい文」の意味は同じであるつもりが児童にとっては二つの違う意味に解釈したと考えられる。設問文も改善する必要がある。

中学校第 1 学年の正答は文中の「行き届かない」の否定を「行き届いた」と肯定に書き直すだけであるが、全体の通過率は 0.5% である。理由として「3～5段落の中で書き方の間違がある」と記したために、その範囲しか読まずに解答しようとしたことが挙げられる。指定された範囲を読めば解答できる問題ではなく、全文を読み、書かれている内容をよく理解したうえで考えなければ間違いに気付かない。

推敲は、文を書いた後に仮名や漢字など表記上の間違いを正すことだけを意味しない。系統性を構造的に理解したうえで、小学校中学年はよい表現に書き直し、高学年は表現の効果はどうかといった視点、中学校は読みやすく分かりやすい文章になっているかどうか、文章の全体を読んでよりよい文章になるような視点で考えさせたい。

〔「交流」に関する設問の考察〕

小学校低学年は書いたものの感想を伝え、中学年は書き手の考えの明確さに対して意見を述べ、高学年からは読み手が書き手によりよい文章にするために助言することを指導の中心とした内容であり、活用 S の設問である。

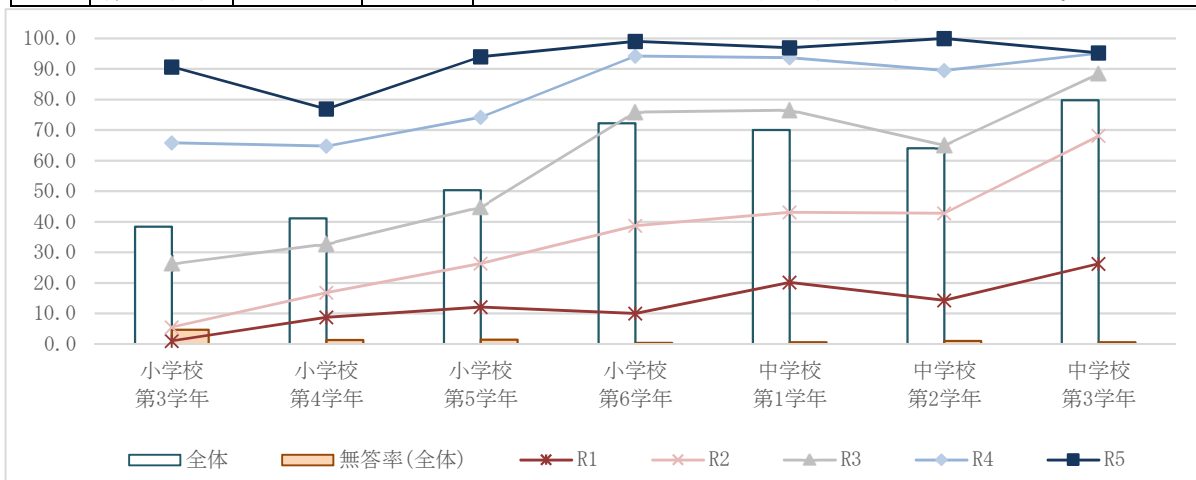
小学校第 4 学年は通過率が 24.2% である。文章の書き方のよい点や工夫した点を見付けるだけでなくその理由も書き、両方の条件を満たして正解となる。また、中学校第 2 学年は助言する内容を書くだけではなく、助言する根拠も書かなければならない設問であり、通過率が 31.4% である。このことから、考えや意見をもつときにはその支えとなる「根拠」と「理由」を明確にしたうえで、より説得力が増すようにさせる必要がある。「どうして?」「なぜ?」「どこからそう考えたの?」と常に問い返して考えさせたり、既習事項や既有知識・個人的な経験を思い返して考えさせたりする指導が不可欠である。

小学校高学年からは読み手が書き手によりよい文章にするために助言をするという内容である。小学校第 6 学年の通過率は 14.6% であるが、中学校第 1・3 学年の通過率は 53.3%・60.1% と上昇しているため、小学校では書かれている内容の理解に学習の重点を置きすぎ、高学年の指導事項である「表現の仕方に着目して助言し合うこと」の学習経験が十分ではないのではないかと考えられる。指導内容の系統性を構造的に理解したうえで、適切な指導を連続的に展開することが求められている。

エ 読むこと「説明的な文章」(文章の解釈の系統)

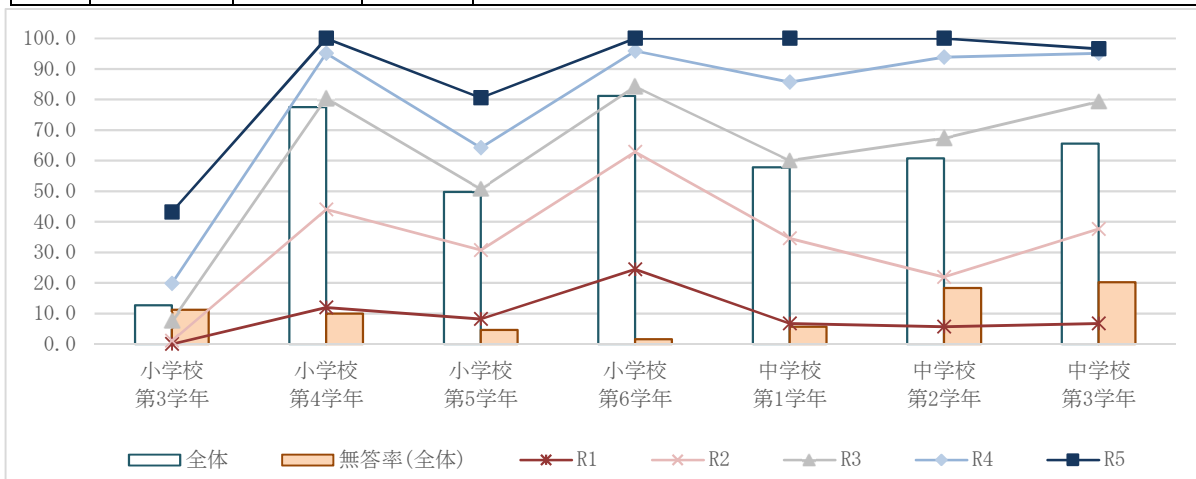
①「文章の解釈」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 B	3-2	イ 文章の内容の大体を読む。
	第4学年	基礎 B	3-2	事実の文と考えの文を区別する。
	第5学年		3-2	イ 事実の文と考えの文の記述の仕方の違いに気付く。
	第6学年	基礎 B	3-2	ウ 事実の文と考えの文を読み分ける。
中学校	第1学年	基礎 B	3-2	ウ 事実から何が分かるかを考える。
	第2学年	基礎 B	3-2	イ 中心的な内容を捉えて要約する。
	第3学年	基礎 B	3-2	イ 段落が文章全体の中で果たす役割を捉える。



②「考えの形成」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 A	3-3	エ 大事な文や言葉を書き抜く。
	第4学年	基礎 A	3-4	エ 中心となる語に注意して要点をまとめる。
	第5学年		3-4	エ 文中の言葉を使って文章を要約する。
	第6学年	基礎 A	3-4	オ 筆者の考えについて自分の考えをもつ。
中学校	第1学年	基礎 A	3-4	オ 筆者のものの見方について考えをもつ。
	第2学年	基礎 A	3-4	エ 筆者のものの見方や感じ方について考えをもつ。
	第3学年	基礎 A	3-4	エ 筆者のものの見方や感じ方について考えをもつ。



〔「文章の解釈」に関する設問の考察〕

小学校では書かれている内容の大体を捉えたり、事実の文と考えの文との違いを区別したりすること、中学校では中心的な内容を捉えて要約したり、段落が果たす役割を捉えたりすることを趣旨とした設問で、全ての児童・生徒に確実な習得を目指す基礎 B のレベルである。小学校から学年が上がるにつれて徐々に通過率が上がり、R1・2 も同じように上がっている。このことは各学年において指導事項を踏まえた指導が系統的に、かつ連続的に行われていることの証である。小学校から中学校までの9年間を見通した指導の成果が表れ、今後更なる効果が期待される。

小学校第3学年は内容の大体を理解しているかどうか問われる設問であり、通過率が38.4%と基礎 B としては課題が大きい。紹介されている三つの似たような遊びで使う道具のうち二つは何かを聞かれている。「木などにひもをまきつけて」の中の「ひも」を選択できない児童が35%いることから、「木」の言葉に目を奪われたと思われる。大事な言葉の抽出は低学年の指導事項である「大事な言葉を書き抜く」ことにもつながり、重要語句に着目することができるかどうか読みの力に大きく関わることから、丸で囲む、線を引く、書き抜く等、視覚化する活動を通して確実な力となるような指導が大切である。また、事実の文・意見の文についても色別にサイドラインを引いて区別をして読み分ける指導も効果的である。

〔「考えの形成」に関する設問の考察〕

全児童・生徒に、より一層の育成を目指す「思考力・判断力・表現力等」を出題趣旨とする活用 A の設問である。通過率は小学校3・5学年を除いて、おおむね60%以上である。大事な言葉や文を書き抜く力が中学年の要点をまとめ、要約する力につながり、その力が高学年の要旨を捉える力につながっていく。中学校では要旨を捉えるだけでなく、筆者のものの見方や感じ方について自分がどう考えるのかまで高めていく。

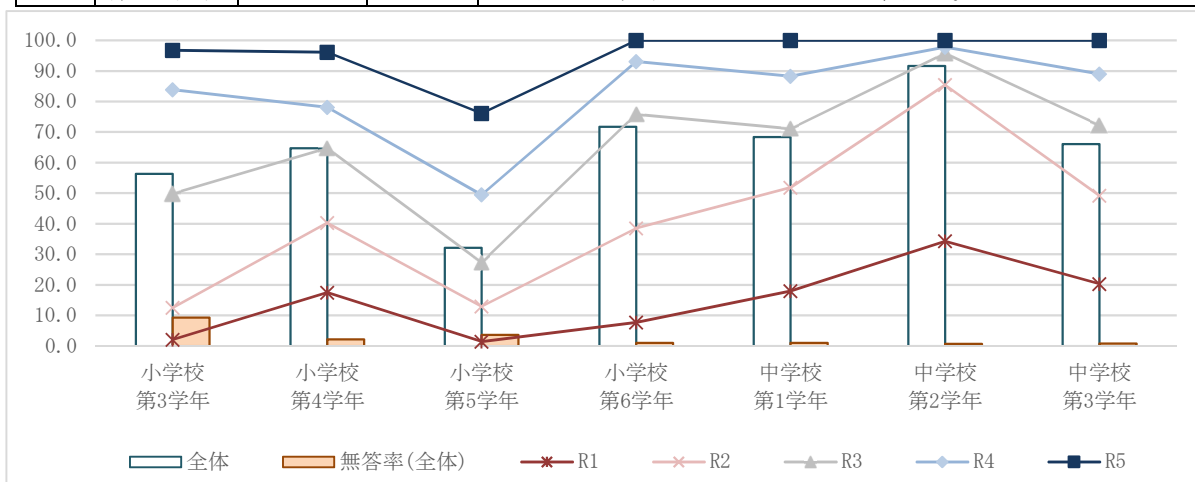
自分の考えを形成する基礎となる「大事な言葉や文を書き抜く」小学校第3学年の通過率は12.7%と全学年を通して最も低い。その理由の一つとして「1文を文章の中から書き抜きましょう」の「1文」の意味が理解できなかったことが挙げられる。文の指導は1学年の早々に『ぶんをつくろう』で「ぶんのおわりには、『まる』をつけます」と書かれていて既習事項である。文意識は読む指導の中においては最重要事項であるにもかかわらず、「文」の指導が十分になされていないのではないと思われる。段落を構成する単位が「文」であり、その段落が何文からなるのかの指導は欠かせない。幾つかの文の中から中心文を見だし、中心文の中から要点を見付け、要点を基に要約するといった一連の学習過程はどれも欠かせない指導事項である。

書き抜く学習は、叙述に基づいて考えたり想像したりする言語活動の初歩となる。「どの言葉を基にして考えたのか」「どの文に着目すると想像できるか」等思考力を高める根拠となるものが言葉であり文である。確実な力を身に付けさせたい。

オ 読むこと「文学的な文章」（文章の解釈／自分の考えの形成の系統）

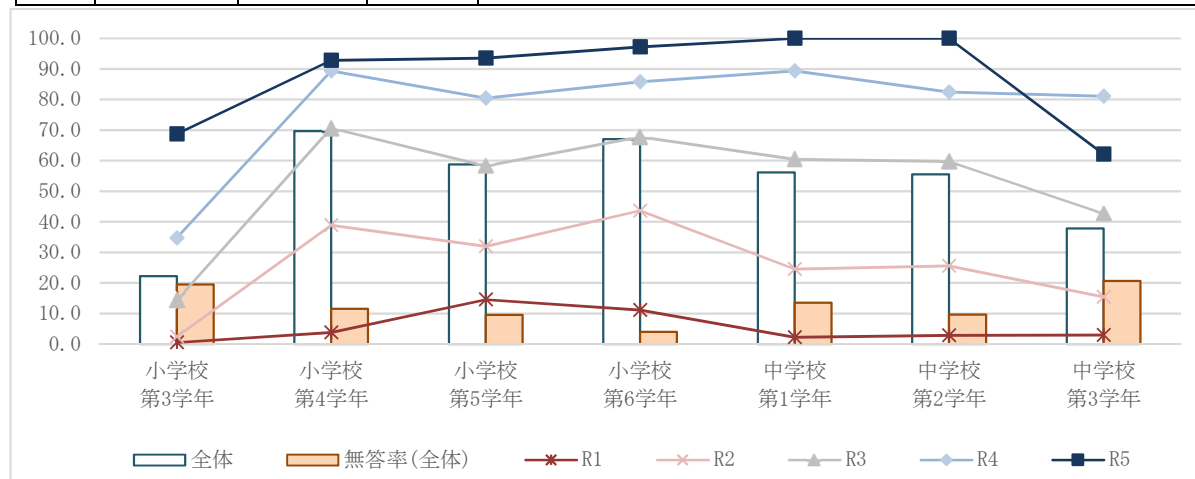
① 「文章の解釈」に関する設問の出題趣旨と学力段階別（準）通過率（％）

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 C	4-1	ウ 場面の様子を想像する。
	第4学年	基礎 C	4-1	ウ 場面の移り変わりを捉える。
	第5学年			
	第6学年	基礎 C	4-1	エ 登場人物の相互関係を捉える。
中学校	第1学年	基礎 C	4-1	ウ 登場人物の行動・会話から内容を理解する。
	第2学年	基礎 C	4-1	イ 描写の効果を考え内容を理解する。
	第3学年	基礎 C	4-1	イ 描写の効果を考え内容を理解する。



② 「自分の考えの形成」に関する設問の出題趣旨と学力段階別（準）通過率（％）

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	活用 A	4-3	エ 文章の中から大事な言葉や文を書き抜く。
	第4学年	活用 A	4-4	ウ 人物の行動の意味を考える。
	第5学年			ウ 人物の描写や気持ちを想像する。
	第6学年	活用 A	4-4	エ 登場人物の心情に付いて自分の考えをもつ。
中学校	第1学年	活用 A	4-4	エ 登場人物の心情に付いて自分の考えをまとめる。
	第2学年	活用 A	4-3	エ 文章と関連付けて自分の見方・考え方を広げる。
	第3学年	活用 A	4-3	ウ 知識や体験を基にして自分の考えをもつ。



〔「文章の解釈」に関する設問の考察〕

小学校では場面を中心に様子や移り変わりをつかみ、中学校では人物の相互関係や描写の様子から深い心情を理解することを趣旨とした設問を抽出しており、レベルは全ての児童・生徒に確実な習得を目指す基礎 C である。小学校第 5 学年の通過率は 32.1% で基礎 C としては極めて低い。その理由として設問文が「時間の流れに注目すると大きく二つの場面に分けられる。後の場面はどこからか」と書かれているために、「時間の流れ」という意味が理解できなかったのではないかと考えられる。同趣旨の小学校第 4 学年は「大きく気持ちが変わったところはどこからか」と書かれており、通過率は 64.7% と第 5 学年と比べ 40 ポイント高いことから、設問の意図がつかみやすかったといえる。設問文の適否は考慮する必要はあるものの、物語の描き方によって、場面の転換の軸は、時間の場合もあれば、気持ちの変化や出来事の場合もある。場面は何によって変わるのかという視点で物語を読む読み方にも言及する必要がある。

中学校第 2 学年の通過率は 91.7% で、しかも R2 以上の段階は 85% を超えている一方、R1 と 2 との差が 50 ポイントある。「歯切れが悪い」という慣用句の意味が分からなければ人物の気持ちを考えることができない。語彙力が学力の差を生むと「答申」で指摘されているように、全学年にわたって全教科で語彙力を豊かにする取組が求められる。

〔「自分の考えの形成」に関する設問の考察〕

小学校第 3 学年の「文章の中から大事な言葉や文を書き抜く」を趣旨とした設問は毎年同じ課題が見られることを踏まえて出題した。全体の通過率は、平成 27 年度が 39.9%、28 年度が 23.9%、今年度が 22.2% となり、年々下がってきている。設問の難易度や個体差にもよるために単純な比較はできないものの、出題趣旨とした力が身に付いていない現状は明らかである。

小学校第 1・2 学年の指導事項である「文章の中から大事な言葉や文を書き抜く」力は、言語を媒体とした国語の言語活動としては土台となるものである。例えば、「どの言葉から想像できるか」「この言葉からどんなことが想像できるか」と問うことで重要語句に着目して考える学習の仕方が身に付く。また、文中にも書かれているが「『ずっと』と『じっと』はどのように違うか」を比較したり、「『おそろしくておそろしくて』と 2 回同じ言葉が使われているのはなぜか」と考えたりすることによって言葉の感覚が磨かれる。どの言葉に着目すれば深い思考が生まれるのかを、教師が真剣に教材と向き合っ問い掛けるしかないのである。教師が教材をよく読み込み、発問を工夫することによってでしか深い学びは成立しない。

「大事な言葉や文を書き抜く」力は、中学年の「叙述を基に想像して読む」力、さらに高学年の「優れた叙述について自分の考えをまとめる」力、中学校の「描写に注意して読む」力へとつながっていく。国語科の指導内容は螺旋的・反復的に繰り返しながら学習するものであるため、どの学年でも丁寧に取り組む必要がある。

【主語・述語の関係を理解する設問 大問2 (2) 基礎C 49.1%】

つぎの文から、主語（「何が」「何が」「何が」にあたることば）と述語（「どうした」「どうする」にあたることば）をえらび、記号で答えましょう。

(ア) わたしの(イ) 弟は(ウ) 昼休みに(エ) 友だちと(オ) こういで(カ) あそぶ。

■ 結果

全体の通過率は49.1%であった。段階別に見ると R5=92.8%、R4=74.3%、R3=41.5%、R2=11.5%、R1=1.0%であり、R1・2と3との段階差が大きい。正答は主語が(イ)の「弟は」、述語が(カ)の「あそぶ」であり、完答となる。両方のどちらの間違えている場合が29.8%、16.6%が主語か述語のどちらかに誤答がみられた。

■ 考察

通過率が50%以下であり、16.6%が主語と述語のどちらかを誤答してしまっただけの結果から、主述の関係を理解しきれていない児童が多いといえる。

この原因として、文の始まりに出てくる言葉を主語と捉えていること、人称を表す言葉が「わたし」「弟」と複数出てきたことよって、主語がつかみにくかったことが挙げられる。

また、主語と述語を探す際の手順として、まず述語（「どうした」「どうする」）の「あそぶ」を押さえ、「あそんだ」のは誰かと考えれば、主語（「何が」「何が」）は「弟は」と見つかる。見つかった主語「弟は」と述語「あそぶ」の言葉をつなげるだけでも正しい意味の文が完成する。このような主述の関係を理解したり活用したりする学習が不足していたと考える。

■ 授業改善

- (1) 「読み」活動においては必要に応じて文中の主語と述語を確かめるようにする。その際、主語と述語を色分けにすると視覚的に捉えることができ、文の意味を正確に理解して読み進められるような手だてとなる。
- (2) 主語の書かれ方について、様々な場合があることを指導する。

- ① 主語が二人以上の場合
 - ② 主語に修飾語が付いている場合
 - ③ 主語と述語が離れている場合
 - ④ 主語を省略したり、人物や生物ではなく物であっても主語になったりする場合
 - ⑤ 主語の後に付く助詞が、「こそ」「も」「か」などの場合
- (3) 「書く」領域では、短く簡潔な文中で主語と述語の両方を表現し、照応関係を明確にした文を意識して書かせるようにする。

【時間・事柄の順序を考える設問 大問3 (1) 基礎C 44.0%】

「ハンター」は、どんな遊びですか。文章中で説明されている 順番が正しいもの を一つ選び、記号で答えましょう。

ア ハンターが、棒を拾って置き直す。 イ ハンターが、木の棒を木の板に乗せる。

ウ 隠れる人が、板を踏んで棒をばらまぐ。 エ ハンターが、見つけた人の名前を呼ぶ。

① イ→ウ→エ→ア ② イ→ウ→ア→エ ③ イ→ア→ウ→エ

■ 結果

全体の通過率は44.0%であった。段階別に見ると R5=88.8%、R4=69.9%、R3=34.6%、R2=10.1%、R1=1.0%である。

正答は、②である。最多の誤答は「その他」の33.8%である。「その他」は答え方を誤ったもので、記号「①・②・③」の中から選んだのではなく、記号「ア・イ・ウ・エ」の中から一つ選び、記入したものが含まれている。次いで①を選んだ12.0%、③を選んだ6.3%、そして無答が2.9%である。

■ 考察

この設問で設定されている接続語は「まず」と「それから」である。「まず」に対応する記号がイ、「それから」に対応する記号が「ウ」というところから、選択肢を①と②とに絞りこむことができる。①・②・③と記入した62.3%の内、①と②を解した52.0%は、この順序を表す接続語を理解していると考えられる。

順序の3番目と4番目を考える際には、文章を正しく理解することが必要となる。本文は修飾語が多く主語と述語が離れているためにやや難しい。内容を正確に理解したりうえで、端的に書かれている設問の文を照らし合わせることで正答に辿り着くことができる。また、解答の記入方法の誤答である「その他」が他の設問に比べて多い。理由として、問題文を「ハンターはどんな遊びですか…正しいもの一つを選び…」など部分的に読み飛ばして答えたためではないかと考えられる。また、設問の意図や設問文の意味を正確に読み取ることでできていないことも要因に挙げられる。

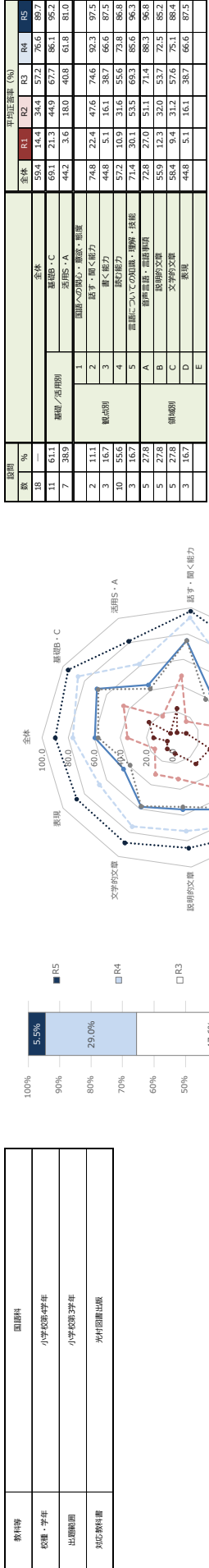
■ 授業改善

- (1) 接続語の学習内容を定着させる。手順説明を書いた教材文「しかけカードの作り方」(2年下)の学習の際に、順序を示す接続語に印を付ける。続く「おもちゃの作り方」で手順説明の文章を書かせる際に、必ず順序を示す接続語を使わせる。
- (2) 文章の細部を読み飛ばさずに丁寧に読む力を付けるには音読が有効である。ペアで音読を聞き合い、一字一句でも読み間違えたら読み手を交代するゲームを行うなど、日常的に音読を行い、視覚で文字を辿る力を付けることが有効である。

小学校第4学年

説明番号	出題		学習目標の観点					評価基準(%)					結果												
	内容	形式	設問レベル	1	2	3	4	5	A	B	C	D	E	1	2	3	4	5							
1	1	1	読みの中心に気をつけて聞くこと	選択	選択	選択B	選択B	選択B	■	■	■	■	■	75.2	29.5	48.2	75.0	91.5	98.4	0.6	9.8	0.2	0.1	0.0	0.0
2	1	2	種類したり感想を述べたりすること	自由記述	選択	選択B	選択B	選択B	●	●	■	■	■	74.3	15.3	46.9	74.3	93.1	96.7	8.1	36.6	16.9	7.4	1.3	1.1
3	2	1	疑問に答えることや説明すること	選択	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	90.7	53.6	83.1	92.2	96.7	100.0	0.5	7.7	0.5	0.0	0.0	0.0
4	2	2	理由や根拠を述べたりすること	選択	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	52.3	10.9	23.2	45.4	75.9	94.5	0.7	10.4	1.0	0.1	0.0	0.0
5	2	3	問題を解いていく方法を考えること	自由記述	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	71.2	25.7	54.0	70.3	84.3	94.5	0.7	10.4	1.0	0.1	0.0	0.0
6	3	1	内容の中心となる語句や文意を捉えること	選択	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	64.4	11.5	33.0	60.7	87.1	99.5	0.9	11.5	1.2	0.2	0.0	0.0
7	3	2	言葉と意味の関係を考えること	選択	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	41.2	8.7	16.9	32.7	64.8	76.9	1.3	14.2	1.5	0.6	0.3	0.0
8	3	3	関係词语の関係を捉えること	選択	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	85.3	29.0	64.5	87.3	99.0	100.0	0.9	12.0	1.0	0.2	0.1	0.0
9	3	4	要旨や中心に注目して読み、引用、要約すること	記述	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	77.5	12.0	44.0	80.5	95.1	100.0	10.0	51.4	26.7	7.2	1.4	0.0
10	3	5	文章の中心となる語句や文意を捉えること	自由記述	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	11.1	0.5	1.5	7.1	16.7	49.5	13.4	49.2	27.4	13.5	2.6	1.6
11	4	1	場面や状況の中心となる語句や文意を捉えること	選択	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	64.7	17.5	40.3	64.7	78.1	96.2	2.1	25.7	3.7	0.5	0.1	0.0
12	4	2	登場人物の性格や特徴を捉えること	選択	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	67.3	18.0	44.3	67.3	81.6	92.3	2.2	25.7	3.9	0.5	0.1	0.0
13	4	3	登場人物の感情や態度を捉えること	記述	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	63.0	4.9	22.7	61.2	88.3	94.5	7.1	48.1	22.2	3.4	0.2	0.0
14	4	4	登場人物の行動や変化を捉えること	記述	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	69.7	3.8	38.9	70.6	89.4	92.9	11.6	60.7	30.3	9.0	0.5	0.5
15	4	5	登場人物の行動や変化を捉えること	自由記述	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	72.4	2.7	39.1	74.3	94.7	98.4	6.7	39.3	15.9	5.3	0.2	1.1
16	5	1	文章の中心となる語句や文意を捉えること	選択	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	36.5	0.0	6.6	27.3	62.8	80.8	14.0	59.6	31.5	12.8	2.4	0.0
17	5	2	文章の中心となる語句や文意を捉えること	自由記述	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■	24.2	1.1	2.4	14.6	42.2	83.5	18.6	63.9	41.3	18.7	3.3	1.1
18	5	3	文章の中心となる語句や文意を捉えること	自由記述	選択	選択	選択	選択	●	●	■	■	■												
19																									
20																									
21																									
22																									
23																									
24																									
25																									
26																									
27																									
28																									
29																									
30																									

■学習状況の判定（学力段階）、設問別の平均正答率(%)



レベル	学習状況の判定(学力段階)				
	R1	R2	R3	R4	R5
説明	5.5%	12.4%	47.6%	29.0%	5.9%
基礎	5.5%	12.4%	47.6%	29.0%	5.9%
応用	5.5%	12.4%	47.6%	29.0%	5.9%
発展	5.5%	12.4%	47.6%	29.0%	5.9%
総合	5.5%	12.4%	47.6%	29.0%	5.9%

【修飾語・被修飾語の関係を理解する設問 大問2 (2) 基礎C 52.3%】

次の文の「かばん」をくわしく説明している言葉を二つ選び、記号で答えましょう。
 (ア) お母さんの (イ) 大きな (ウ) かばんに、(エ) たくさんの (オ) 本が
 入っている。

■ 結果

どんなかばんなのかを詳しく説明している言葉を選ばない誤答が33.8%であることから、誤答の原因として、「直前にある言葉が詳しくする言葉である」と思い込んで「大きな」を選択したことが挙げられる。修飾語が二つある場合や修飾語と被修飾語とが離れている場合などの学習に不慣れで、語と語の関係が捉えられなかったことが考えられる。また、「お母さんの」の「の」は、「美しい」「白い」などの形容詞ではなく、連帯修飾語であるために修飾語だと分かりにくかったことも考えられる。「その他」は4.5%であることから、設問文をよく読まずに二つを選ばなかったり、記号で解答しなかったりした可能性も考えられる。

■ 考察

(イ)は選んで(ア)を選ばない誤答が33.8%であることから、誤答の原因として、「直前にある言葉が詳しくする言葉である」と思い込んで「大きな」を選択したことが挙げられる。修飾語が二つある場合や修飾語と被修飾語とが離れている場合などの学習に不慣れで、語と語の関係が捉えられなかったことが考えられる。また、「お母さんの」の「の」は、「美しい」「白い」などの形容詞ではなく、連帯修飾語であるために修飾語だと分かりにくかったことも考えられる。「その他」は4.5%であることから、設問文をよく読まずに二つを選ばなかったり、記号で解答しなかったりした可能性も考えられる。

■ 授業改善

- (1) 文の基本形は主語と述語であり、どんなに長い文でも小学校の教材文には主語と述語が書かれている。初めに、述語を見付けてから主語を探す。次に、主語や述語を詳しく説明している言葉はどれかを考える。さらに、主語と述語を赤色、それらを説明している言葉は青色などと識別させる活動に取り組みさせることで文の構造が視覚的に捉えられるようにする。
- (2) 主語と述語のみで構成された文に修飾語を加えて文を詳しくする学習を行う。修飾語の例を挙げてふさわしい語を選択させるなど、初歩的な活動を取り入れる。
- (3) 読活動のみならず、書いたり、話したり聞いたりする活動の際にも、修飾語を意識させたり、修飾と被修飾の関係を考えさせたりすると効果的である。

【事実と意見の関係を考える設問 大問3 (2) 基礎B 41.2%】

上の文章を読んで、筆者の意見として正しい文を次から一つ選び、記号で答えましょう。
 (正答) ウ 赤はよく目立つので、マダイやキンメダイはてきにおそわれやすいように思います。

■ 結果

全体の通過率は、41.2%であった。段階別にみると、R1=8.7%、R2=16.9%、R3=32.7%、R4=64.8%、R5=76.9%となっている。無答の割合は全体では1.3%と低い。R1=14.2%で他段階と比べると高い。最多の誤答は、アの42.2%で、正答の選択率と近似している。

■ 考察

正答ウは、本文からの抜き出しであり、「～と思います。」と書かれていることから意見であることが分かり、選択肢として選びやすい。ただし、8段落の内容であるので、文章を中盤過ぎまで正しく読まなくては答えられないために、通過率がそれほど伸びなかったと考えられる。

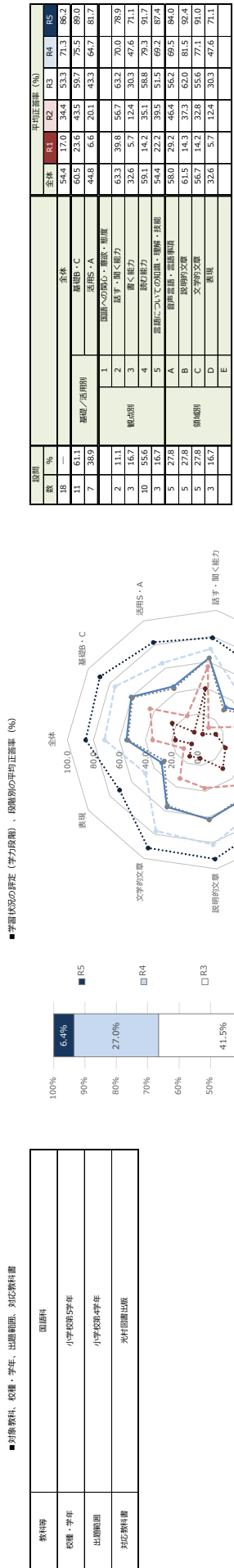
誤答アは、本文からの抜き出しであるが事実を述べた文である。事実と意見を区別することができない児童が、誤って選んだものと考えられる。また、2段落に書かれている内容であるため、設問をよく理解しないままに書き出しを読んで回答した児童がいたことも考えられる。誤答イは、文末が「～と思います。」だが、事実、意見のどちらでもなく、誤答エは事実と反対の内容を述べている。二つの選択率は合わせても13.2%にとどまっており、これらは誤りであることが分かりやすかったといえる。つまり、文章の大体の内容を捉えることができても細部まで正確に読み取ることが困難で、事実と意見の区別をすることができない児童が多いことが分かる。

■ 授業改善

- (1) 説明的文章を読むときは、事実と意見を分けて色別にサイドラインを引かせるなど、視覚的に違いが分かるようにしながら文章を読むように指導する。その際には、内容を理解することに加えて、文末の表現に着目させる。よく使われる表現「～なのだ。」「～と分かった。」(事実)や、「～と思う。」「～と考える。」(意見)などが読み分けられるように指導する。
- (2) 生活文、観察文、報告文、新聞などを書くときは、事実の文と意見の文との書き分け方を丁寧に指導する。書き分け方が理解できれば両者の区別が分かりやすくなり、日常的に事実や意見の表現方法を意識して使い分けられるようになる。

小学校第5学年

説明番号	出題					出題の領域					出題の割合															
	内容	解答形式	設問レベル	1	2	3	4	5	A	B	C	D	E	割合	割合	割合	割合									
1	1 1 読みの中心に気をつけて書くこと	選択 選択	基礎B	●					■					96.3	73.3	94.2	98.5	98.8	100.0	0.2	1.5	0.2	0.0	0.1	0.0	
2	1 2 種類したり感想を述べたりすること	自由記述 選択	基礎B		●				■					30.3	6.3	19.1	27.8	41.3	57.7	6.3	27.2	11.5	4.4	2.0	0.5	
3	2 1 読点や句読点の役割や使用法を説明すること	選択 選択	基礎C				●		■					32.8	13.6	17.1	24.0	50.9	78.1	0.3	3.4	0.2	0.2	0.0	0.0	
4	2 2 傍線部・読点の役割を説明すること	選択 選択	基礎C				●		■					44.1	18.0	28.5	39.3	58.9	84.1	0.3	2.4	0.5	0.0	0.0	0.0	
5	2 3 傍線を引いてその役割を説明すること	選択 選択	基礎C				●		■					86.5	35.0	72.8	91.2	97.8	100.0	0.2	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	
6	3 1 内容の中心となる語句や文意を捉えること	選択 選択	基礎B				●		■					88.1	32.5	70.1	91.7	98.0	100.0	0.5	5.3	0.2	0.2	0.0	0.0	
7	3 2 事象と意見の関係を探ること	選択 選択	基礎B				●		■					50.3	12.1	26.3	44.8	74.2	94.0	1.4	9.2	1.7	0.9	0.5	0.0	
8	3 3 関係目録の関係を捉えること	選択 選択	基礎B				●		■					76.1	16.5	48.2	81.4	96.0	99.5	0.5	5.8	0.5	0.2	0.0	0.0	
9	3 4 要点や細かい所に注意して読み、引用、要約すること	記述 選択	基礎A				●		■					49.8	8.3	30.8	50.7	64.2	80.6	4.6	27.2	10.6	1.9	0.2	0.0	
10	3 5 文章の細かい所に注意して読み、自分の考えをもちこと	自由記述 選択	基礎A				●		■					45.1	1.9	11.1	41.3	74.8	88.1	12.9	45.1	27.7	10.3	1.9	0.0	
11	4 1 場面や場面の変化を捉えること	選択 選択	基礎C				●		■					32.1	1.5	13.0	27.3	49.5	76.1	3.7	22.8	6.8	1.9	0.5	0.0	
12	4 2 登場人物の性格や特徴を捉えること	選択 選択	基礎B				●		■					70.7	36.9	58.1	68.8	84.6	94.5	0.6	6.3	0.7	0.2	0.0	0.0	
13	4 3 登場人物の気持ちや態度を捉えること	記述 選択	基礎A				●		■					67.6	8.7	36.1	72.7	80.9	96.0	6.9	39.3	15.6	3.1	0.7	0.0	
14	4 4 人物や情景の描写などについて想像すること	記述 選択	基礎A				●		■					58.8	14.6	32.0	58.3	80.4	93.5	9.5	44.7	19.1	6.4	1.5	0.0	
15	4 5 文章の細かい所に注意しながら読み、自分の考えをもちこと	自由記述 選択	基礎A				●		■					94.5	9.2	25.0	50.7	81.9	94.0	18.1	58.3	34.2	16.7	4.2	1.8	
17	5 1 文章の中心となる語句や文意を捉えること	選択 選択	基礎B				●		■					5.5	0.0	0.0	1.3	9.7	36.3	13.2	49.0	28.5	9.5	2.7	0.5	
18	5 2 筆者の考えや態度を捉えること	自由記述 選択	基礎A				●		■					32.5	3.4	5.8	28.0	52.8	82.6	17.5	58.3	36.6	13.8	4.3	0.5	
19																										
20																										
21																										
22																										
23																										
24																										
25																										
26																										
27																										
28																										
29																										
30																										



説明	学習状況の判定(学力段階)				
	R1	R2	R3	R4	R5
全体	54.4	17.0	34.4	53.3	71.3
基礎	60.5	23.6	43.5	59.7	75.5
基礎・A	44.8	6.6	20.1	43.3	64.7
基礎・B	63.3	39.8	56.7	63.2	70.0
基礎・C	32.6	5.7	12.4	30.3	47.6
読む能力	59.1	14.2	35.1	58.8	79.3
読む力	54.4	22.2	39.5	51.5	69.2
読む力・A	58.0	29.2	46.4	56.2	69.5
読む力・B	61.5	14.3	37.3	62.0	81.5
読む力・C	56.7	14.2	32.8	55.6	77.1
表現	32.6	5.7	12.4	30.3	47.6

レベル	S	3	16.7
説明	A	4	23.2
基礎	B	6	33.3
C	S	27.8	
読む力	9	50.0	
読む力・A	5	27.8	
読む力・B	11	64.1	
読む力・C	2	11.1	
読む力	5	27.8	

形式	S	3	16.7
説明	A	4	23.2
基礎	B	6	33.3
C	S	27.8	
読む力	9	50.0	
読む力・A	5	27.8	
読む力・B	11	64.1	
読む力・C	2	11.1	
読む力	5	27.8	

【語句の類別を理解する設問 大問2 (1) 基礎C 32.8%】

言葉进行分类しました。分類のしかたが、他とちがっているのはどれですか。次から一つ選び、記号で答えましょう。(正答) ア 太陽・まぶしい・のぼる

■ 結果

ア～エの選択肢があり、イは接続詞、ウは形容詞、エは動詞で、同じ品詞の組み合わせである。アは、「名詞、形容詞、動詞」の組み合わせで誤りである。記号の選択であるため無答は0%であるが、通過率は32.8%と基礎Cとしては低い。段階別通過率は、R1=13.6%、R2=17.1%、R3=24.0%、R4=50.9%、R5=78.1%であった。他の設問の多くは、R4・5の通過率が80%を超えているのに対し、本設問ではどの段階においても通過率が低い。誤答は、イ(だから・しかし・そして)13.1%、ウ(黒い・遠い・古い)が41.97%、エ(食べる・泳ぐ・走る)は14.9%である。

■ 考察

今回は選択肢の中に分類する言葉が三つずつ記されており、分類の手掛かりとなる言葉が多かったものの通過率が低かった。その要因の一つとして、そもそも「分類」を捉えていない児童が多かったのではないかと考えられる。品詞の特徴や働きが分かり、さらに、設問では品詞によって分類されているということを理解しないと正答を選ぶことができない。「分類」を「仲間分け」のようなものとして捉えた場合、(太陽・まぶしい・のぼる)という言葉仲間として捉えたのではないかと、イは接続詞という見た目にも特徴的な品詞であり、エの動きを表す言葉も児童にとって馴染みのある品詞であるため、選択されることは少なかった。誤答として最も多く選択されたウ(黒い・遠い・古い)は、品詞による分類や働きの違いではなく、言葉の印象(色・距離・古さ)として別々のものとして捉えたのではないかと推察される。

■ 授業改善

- (1) 前学年までに「言葉には性質や役割による語句のまとまりがあること」を理解し、特徴や使い方によって類別して捉えることができるように指導しておく必要がある。品詞の特徴に着目させて言葉集めをしたり、集めた言葉を使って短文づくりをし、りする学習を日常的に取り入れるとよい。
- (2) 説明的文章・文学的文章にかかわらず、主語と述語の関係、修飾と被修飾の関係、指示語、接続語の役割など、言葉の働きを意識させて文や文章の構造を読んでいくことを繰り返し行う。新学習指導要領では語彙を豊かにすることの必要性が取り上げられている。中学年までの「主述の関係」「語句と語句の関係や役割」の学習の上に、高学年での「文と文との接続」「文章の構成や展開」と積み重ねていく。

【場面の移り変わりを捉える設問 大問4 (1) 基礎C 32.1%】

この文章は、時に注目すると、大きく二つの場面に分けられます。後の場面はどこから始まりますか。初めの三字を書きぬきましょう。(正答) その日

■ 結果

設問の中に、「時間の流れに注目すると」という言葉が入っていることで、時間の経過が分かる言葉を探さすことが必要である。「その日」が時間の経過を表す言葉となり、後半の場面の始まりとなる。物語文の他の設問の通過率が全て50%を超えているのに対し、本設問の全体の通過率は32.1%である。段階別では、R1=1.5%、R2=13.0%、R3=27.3%、R4=49.5%、R5=76.1%である。全体の無答率は3.7%である。誤答率は67.7%で、誤答例として「運動場に出ると」「運動場」や「花だんの近く」の「花だん」が挙げられる。

■ 考察

時間の流れを軸にした場面の移り変わりを意識して読むことができていないことがうかがえる。「運動場」と答えた児童は、登場人物たちが場所を移動したことを場面の転換と捉え、「花だん」と答えた児童は、登場人物が話し始めたことに着目したと考えられる。どちらも、二つに分ける際の視点が「時間の流れ」であることの意味が弱い。「時間の流れ」が分かる言葉に着目させたい。また、「その日から」の「その」が何を示しているのかが分からず、「その日」を時間の流れを表す言葉として認識できなかつたことも考えられる。さらに、「その日」が物語全体の終わりの方にあるため、後半部分として捉えることが難しかったとも考えられる。

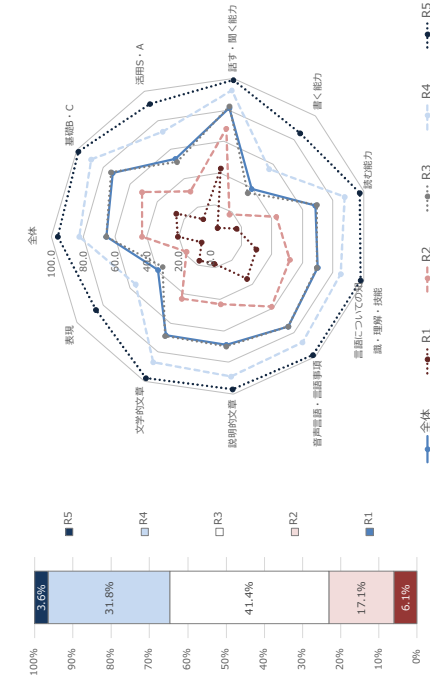
■ 授業改善

- (1) 新学習指導要領では、読むことに関して、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることを挙げている。物語文を指導する際には、中学年の間に作品全体のつながりを捉えて読めるようにしておく必要がある。細かな部分だけを切り取り読んで読むのではなく、登場人物や中心人物は誰なのか、どこで何がどう変わるのか、終わり方はどんなかななどについて視点を明らかにして、物語全体を捉えて読むようにする。
- (2) 物語の場面は、時間の経過、場所の移動、中心人物の変容や登場人物たちの周りで起こる出来事などによって分けてられる。それらの視点をはっきりとさせて読むようにさせるとよい。また、新学習指導要領では、重要な語や文を考えて選ぶ出すことを挙げている。場面を読み分ける言葉が見付けられるように、接続詞や指示語に着目して読み、そこに印を付ける活動を取り入れ、繰り返ししていく。

小学校第6学年

説明番号	出題		設問レベル		学習目標の観点					知識の領域					集積									
	形式	解答形式	1	2	3	4	5	A	B	C	D	E	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5		
1	1	1	読し手の意図を読み取る	選択	選択	●	●	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
2	1	2	読し手の意図を自分の意見と出さぬようにして考えをまとめること	自由記述	複条件																			
3	2	1	漢字の由来、特長などについて理解すること	選択	選択																			
4	2	2	文や文章にはいるかを感じがめることについて理解すること	記述	記述																			
5	2	3	日本語で使われる漢字の使い分けを理解すること	記述	記述																			
6	3	1	文章の表現や構成の面白さを感じる	選択	選択																			
7	3	2	文章の表現や構成の面白さを感じる	選択	選択																			
8	3	3	文章の表現や構成の面白さを感じる	選択	選択																			
9	3	4	自分の考えを広げたり深めたりすること	自由記述	複条件																			
10	3	5	自分の考えを明確にすること	自由記述	複条件																			
11	4	1	登場人物の相互関係を捉えること	選択	選択																			
12	4	2	登場人物の相互関係を捉えること	選択	選択																			
13	4	3	場面について理解を捉えること	選択	選択																			
14	4	4	場面について理解を捉えること	選択	選択																			
15	4	5	場面について理解を捉えること	自由記述	複条件																			
16	5	1	場面について理解を捉えること	自由記述	複条件																			
17	5	2	場面について理解を捉えること	選択	選択																			
18	5	3	場面について理解を捉えること	記述	複条件																			
19	5	4	場面について理解を捉えること	自由記述	複条件																			
20																								
21																								
22																								
23																								
24																								
25																								
26																								
27																								
28																								
29																								
30																								

■学習状況の判定（学力段階）、段階別の平均正答率（%）



■対象教科、段階・学年、出題範囲、対応教科書

教科書	国語科
対象・学年	小学校第6学年
出題範囲	小学校第5学年
対応教科書	教科書出版

【考えを明確に表現するために、文章全体の構成の効果を考える設問

大問5 (1) 基礎 B 47.2%】

上の文章の構成について合うものを、次から一つ選び、記号で答えましょう。

■ 結果

全体の通過率が 47.2%であった。段階別にみると、R5=90.7%、R4=67.8%、R3=43.8%、R2=25.7%、R1=10.6%であり、特に R3 とそれ以下の段階で差が大きくなる。第 5・6 学年の指導事項である「段落相互の関係などに注意して文章を構成すること」が十分に定着していないことが分かる。誤答をみると、最多の A は 30.4%であり、次いで E が 19.0%となっている。無答、その他は選択形式ということもあり 4%未満であった。

■ 考察

説明文でどのような文章構成かを見分けるポイントは、接続詞、文末表現などいくつかある。今回の文章では、E に「～と思います。なぜなら～からです。」という接続詞と文末表現が使われているので、筆者の考えが書かれていることが分かる。E と E では、日本でのインターネット利用状況、世代別利用状況、E と E では、どんなサービスが利用されているかが書かれている。それぞれの段落に書かれている要点をつかむことができなければ大体的な内容を理解することができない。段落の構成が読み取れていなかったことで、正解が導き出せなかったと考えられる。

■ 授業改善

- (1) 筆者が何を書いているのかを読み解くために、接続詞や文末表現に着目する。
・接続詞…「なぜなら」「しかし」「でも」「また」「つまり」など。
・文末…「～です」「～ます」「～である」「～にちがいない」「～でしょう」等。
接続詞や文末表現などにサイドラインを引くと分かりやすい。
- (2) 段落ごとに何が書かれているのか要点をつかむ。また、理由が書かれている部分を囲むことも、読み解いていく手掛かりとなる。
- (3) 文章中に出てくるキーワードを押さえることで、筆者が伝えたいことが理解しやすくなる。今回の問題文には「インターネット」という言葉がたくさん出てくる。そこから、「インターネットの利用」に関するものが書かれている部分を探し、サイドラインを引いたり、囲ったりすることで、段落の内容がより分かりやすくなる。今回の場合は、2 段落で「利用人口」、3 段落で「利用割合」、5 段落で「インターネットの多様化」というキーワードに着目することによって正答が導きやすくなる。

【日常よく使われる敬語の使い方を考える設問 大問2 (2) 基礎 C 49.7%】

次の一文を、意味が同じになるように、二つの文に言いかえます。() に入る言葉を、それぞれ書きましょう。

・兄はまどをふいて、私はそうじ機をかける。

兄は (①)。

私は (②)。

■ 結果

「兄はまどをふいて、私はそうじ機をかける。」という重文を単文に分ける設問である。①まどをふく②そうじ機をかける、が正答である。全体の通過率は 49.7%で無答は 3.4%だった。誤答の中では、文末が敬体になっている文 11.9%、文末の時制が変わっている文 8.5%、その他誤答が 26.3%という結果だった。

段階ごとの通過率は、R5=94.5%、R4=69.7%、R3=46.0%、R2=24.8%、R1=12.2%であり、無答率が 3.4%と他の設問に比べて高かった。

■ 考察

一つの文の中にある主語を見付け、ふさわしい述語を書き分ける。その際の文末表現が一つのポイントとなる。正答「①まどをふく②そうじ機をかける」の通過率が基礎 C であっても 50%に届いていない。文末に関する誤答が多く、原文を基にする意識が低かったと思われる。また、時制の捉え方も不十分であることが分かる。時制が変わることで意味まで変わってしまう、ということの理解が不十分である。

その他の誤答も 26.4%であることから、「二つの文に言いかえる」という設問文の意味の理解が十分にできなかったことによるものと考えられる。設問の意図が理解できれば、容易に単文に分けることができると思われる。

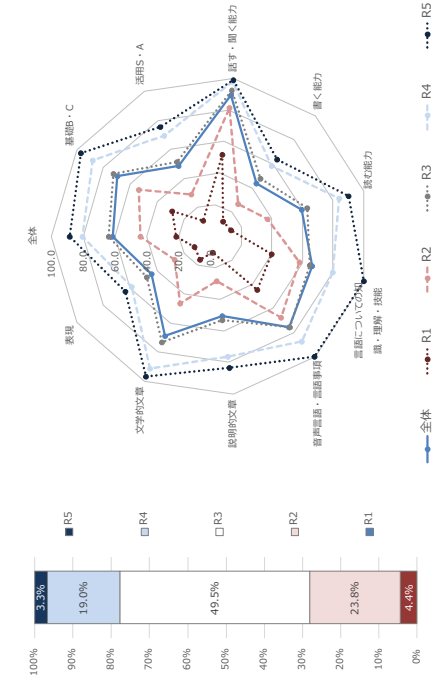
■ 授業改善

- (1) 「文を書き換える」という問題に慣れ、さらには文末の時制が変わることで意味まで変わってしまうことを場面の状況に応じて理解させることが必要である。
- (2) 複文を提示して重文との違いを考えさせることも効果的である。「母の作ったお弁当がおいしい」では、「お弁当」が主語で「おいしい」が述語となる。また、「母の作ったお弁当が」が主部となる。一つの文の中で主述の関係を考えさせる。
- (3) 単元中の言語学習の扱いを再確認する必要がある。「書き換える」とは、意味を変換することではないことを指導する。誤った書き換えなどを提示し、単文に直すことによって文の意味や主語となるものや人が変わってしまうことに気付かせ、正しい文に直す作業をさせたい。類似の課題に取り組みのも効果的である。

中学校第1学年

説明番号	出題		学習目標の観点										評価基準 (%)													
	内容	形式	設問レベル	1	2	3	4	5	A	B	C	D	E	評価基準 (%)												
1	1	1	読し手の意図を読み取る	●					■					88.0	50.6	77.7	91.7	98.4	98.5	0.1	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	
2	1	2	読し手の意図と自分の意見と出さるおそれとして考えをまとめること	●					■					90.7	52.8	85.4	93.2	97.9	100.0	4.0	25.8	5.8	2.8	0.3	0.0	
3	2	1	漢字の由来、特長などについて理解すること		●				■					53.8	22.5	43.5	51.7	71.6	100.0	1.6	12.4	2.3	0.9	0.5	0.0	
4	2	2	文や文章にはいるか解があることについて理解すること			●			■					97.8	76.4	97.9	99.0	99.2	100.0	0.2	4.5	0.0	0.0	0.0	0.0	
5	2	3	言葉や文脈に合うか解があることについて理解すること			●			■					46.8	28.2	33.3	43.4	69.5	100.0	0.9	11.2	1.3	0.2	0.3	0.0	
6	3	1	文章の内容や文脈の関係を理解すること			●			■					44.1	12.4	20.6	44.0	71.6	98.5	1.7	14.6	2.3	0.9	0.3	0.0	
7	3	2	事象と原因、感情の関係を理解すること			●			■					70.0	20.2	43.1	76.5	93.8	97.0	0.6	12.4	0.2	0.0	0.0	0.0	
8	3	3	文章の要約をすること			●			■					59.3	13.5	37.9	62.5	83.9	84.8	2.2	16.9	2.9	1.5	0.0	0.0	
9	3	4	自分の考えを広げたり深めたりすること			●			■					57.8	6.7	34.6	60.1	85.7	100.0	5.7	30.3	9.6	3.8	0.8	0.0	
10	3	5	自分の考えを明確にすること			●			■					22.3	0.0	5.6	22.3	46.8	35.4	12.6	56.2	23.1	8.5	2.1	1.5	
11	4	1	登場人物の相互関係を理解すること			●			■					68.4	18.0	51.9	71.1	88.3	100.0	1.0	20.2	0.4	0.0	0.0	0.0	
12	4	2	登場人物の心情を推察すること			●			■					93.6	42.7	89.8	97.5	99.2	98.5	1.4	23.6	1.5	0.0	0.0	0.0	
13	4	3	場面について理解を深めること			●			■					66.9	12.4	40.8	72.7	93.0	89.4	2.2	24.7	2.9	0.8	0.0	0.0	
14	4	4	自分の考えを広げたり深めたりすること			●			■					86.2	2.2	24.6	60.5	89.3	100.0	13.5	53.9	26.7	8.9	1.8	0.0	
15	4	5	自分の考えを明確にすること			●			■					57.9	5.6	24.4	64.8	87.9	97.0	18.6	62.9	42.3	11.1	1.0	0.0	
16	5	1	自分の考えを明確にするために、文章全体の筋道を整理すること			●			■					77.7	27.0	54.2	85.2	96.4	95.5	4.4	23.6	10.6	1.5	0.3	0.0	
17	5	2	筋道の整理などについて理解を深めること			●			■					0.5	0.0	0.0	0.5	1.3	1.5	35.6	69.7	54.6	32.1	18.0	7.6	
18	5	3	筋道の整理などについて理解を深めること			●			■					53.2	9.0	26.3	57.9	78.1	93.9	17.6	56.2	34.2	11.9	5.2	1.5	
19																										
20																										
21																										
22																										
23																										
24																										
25																										
26																										
27																										
28																										
29																										
30																										

■学習状況の判定 (学力段階)、設問別の平均正答率 (%)



■対象教科、校種・学年、出題範囲、対応教科書

教科書	国語科
校種・学年	中学校第1学年
出題範囲	小学校第2学年
対応教科書	光村図書出版

レベル	説明	S	3	16.7
形式	基礎	A	4	22.2
	基礎	B	6	33.3
	基礎	C	5	27.8
	基礎	D	11	61.1
	基礎	E	11	51.6
基礎	出題	出題	6	33.3
基礎	出題	出題	11	61.1
基礎	出題	出題	0	0.0
基礎	出題	出題	7	38.9

学習状況の判定 (学力段階)	R1	R2	R3	R4	R5
全体	4.4%	23.8%	49.5%	19.0%	3.3%

【敬語を正しく使うこと 大問2 (3) 基礎C 48.3%】

次のア～エの文の中で、使うべき敬語が正しく使われていない文はどれですか。
 (正答) ア お客様が食べた料理は、私がお用意しました。

■ 結果

全体の通過率は 48.3%であった。段階別に見ると R1=20.2%、R2=33.3%、R3=43.4%、R4=69.5%、R5=100.0%である。基礎Cの設問としてはR4以下の通過率が期待値に届いていない。第5・6学年の指導事項である「日常よく使われる敬語の使い方」に慣れることが十分に定着していないことが分かる。誤答をみると、最多のイは30.5%であり、次いでエが12.8%、ウが10.3%であった。回答形式が選択ということもあり、無答・その他は1.0%であった。

■ 考察

アは「お客様が食べた料理は、私がお用意しました。」となっており、本来ならば「食べた」ではなく「召し上がった」という尊敬語を使用すべきことから、アが正答となる。誤答の中で最多であったイは、「先生は、三時ごろ私の家へおいでになります。」である。「先生」に対して「おいでになる」という尊敬語が使用されているのだが、それを「お～する」という謙譲語と混同したことが誤答の要因である。

■ 授業改善

- (1) 敬語については、日常生活の中で「誰が」「誰に対して」「どんなときに」使っているのかを意識させることが大切である。様々な日常会話の中で敬語が使用されている例を示し、どのような意味をもっているのかを考えさせる。特に「お～になる」(尊敬語)と「お～する」(謙譲語)など、まぎらわしい敬語については具体的な文を用いて指導する。
- (2) 問題演習の場合は視覚化する。例えば、①「丁寧語」「尊敬語」「謙譲語」に、それぞれ色を変えてサイドラインを引いて意識させ、②敬語が誰から誰に向けて使われているのか、敬意の方向を矢印で示して確認するとよい。
- (3) 敬語の基本を理解できたら、敬語の使い方「慣れるための活動」を取り入れる。例えば、日常生活においてよく使われる敬語表現を一覧表にし、グループごとにそれらを使用したシナリオを作成し、ロールプレイをする。シナリオを作成する際には必ず共通のテーマを設定して、それに沿ったものを作成するようにし、違った形の謙譲語を三つ以上は使用すること、といった条件を設けることも効果的である。

【文章全体の構成を把握すること 大問3 (1) 基礎C 44.1%】

この文章を、大きく四つに分けた場合、第二・第三・第四の部分はそれぞれの段落からはいまじりますか。その組み合わせとして、最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
 (正答) ア 第二[2] 第三[9] 第四[12]

■ 結果

各段階の通過率は、R1=12.4%、R2=20.6%、R3=44.0%、R4=71.6%、R5=98.5%であり、それぞれの段階差が約20ポイントと大きい。誤答としてはイが34.0%と最も多く、ウは9.4%、エは7.4%である。無答・その他は3.0%であった。

■ 考察

最も多かった誤答イは「第二[3] 第三[9] 第四[13]」であった。ウ・エの選択肢は第三の部分が[8]段落からになっており、「では」という接続詞に着目して第三の部分の始まりを見付けることができた生徒は多かった。

この文章は、第一の部分が「昆虫が春になると目覚めること」、第二の部分が「鳥がなぜ春になると目覚めるか」、第三の部分が「鳥はどこで日の長さを感じるか」、第四の部分は「鳥はどうやって日の長さを感じるか」という内容になっている。

第二の部分を[3]段落からとしてしまふ要因は、「でもほんとうにそうだろうか」という表現を問題提起と捉えてしまったことである。しかし、実際には[1]段落は「昆虫」について書かれており、[2]段落から本題の「鳥」についての内容になっている。

第三の部分は、[13]段落の冒頭にある「じつは」という言葉に惑わされず、[12]段落が第二の部分を受けた新たな問題提起であることに気付けば正解できる。

説明的文章を指導する際は、段落相互の関係や文章全体の構成や展開、表現に着目して文章を読み取り、文章の特徴を捉えられるようにすることが必要である。

■ 授業改善

- (1) 接続詞や指示語の働きに着目し、段落内の意味や働きだけでなく、段落ごとの働きを捉えるようにする。
- (2) 段落の要点をつかみ、小見出しを付けたり要約したりする。字数を制限する等、条件を付けることで要点の整理の仕方が明確になる。そのうえで、小見出しや要約を基に、文章全体の構成が分かるように整理させる。
- (3) 段落には「話題提示・問い、答え・例示・引用・根拠、主張」等の役割がある。デジタル教科書等のICTを活用し、前後の関係を踏まえて考えさせると効果的である。全ての段落ではなく、特徴的な段落を幾つか取り上げて考えさせるとよい。

【イントネーションの違いに気が付くこと 大問2 (1) 基礎C 50.2%】

A・Bの会話のうち、太郎さんが最後のイントネーションを上げるのは、どちらですか。記号で答えなさい。(正答) B

■ 結果

無答率は全体で0.7%と低いものの、半数が誤答のAを選んでおり、全体の通過率は基礎Cであっても50.2%である。段階別にみるとR1=10.0%、R2=27.2%であり、他の段階間と比較して差が小さい。また、R3=47.9%であり、他の設問に比べて通過率が低く、半数以上が正答していない。また、R4=81.0%、R5=100%であり、R3~5の各段階間には20ポイント近い差がある。

■ 考察

通過率が低い原因には、「イントネーション」がもつ働きへの理解が不足していることが挙げられる。「アクセント」、「イントネーション」によって音の高さが変わり、「文末を上げるか下げるかで意味や調子が変わることもある」ということを十分に理解していないかったものと考えられる。

しかし、通過率の低さからそれだけが原因とは考えにくい。まず、「イントネーション」という言葉の理解が不十分であった可能性がある。設問が具体的に「イントネーション」という言葉の理解が不十分であるにもかかわらず通過率が低い、設問の意図を理解できていないことも考えられる。また、「質問の場合はイントネーションを上げて読む」ことは知識としてはあるが、具体的に素材文のどの部分に着目すればよいかを理解できなかったのではないかと推察される。素材文の「高校生になっても、テニス部に入ります。」の「ます。」に着目し、さらに「花子さんの返答から考える」ことが理解できていれば、正答できた設問である。R4・5の生徒は、設問の意図を十分理解する力があつたために8割以上が正答しているのだと考えられる。

■ 授業改善

- (1) 「アクセント」「イントネーション」などの基礎的な用語を知識として押さえ、基本的な音声の働きや仕組みの理解が深まるよう、継続的に指導する。
- (2) 授業時に文章を声に出して読む機会を多く取り入れる。特に詩や文学的文章の朗読では、朗読台本を作成するなどして、感情や意味と「アクセント」「イントネーション」との関係性を理解させる。
- (3) 音の高低を含む文末の表現によって意味が変わるといった日本語の特徴を日常的に意識させる。また、話し合いの機会を定期的に設け、対話において聞き手の反応から話し手の発言がどのように伝わったのかを推察する力を身に付けさせる。

【中心的部分を押さえ、内容を捉えて要約すること 大問3 (2) 基礎B 64.1%】

5~7段落を、中心文をおさえて要約しました。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。(正答) イ

■ 結果

無答率は全体で1.0%と低いものの、3割近くが誤答を選んでおり、全体の通過率は64.1%である。段階別にみるとR1=14.3%、R2=42.8%であり、他の段階間と比較して差が大さい。また、R3=65.1%であり、他の基礎設問の通過率と比べると低い。無答はR1・2以外の段階には全くみられないものの、無答率はR1=21.4%、R2=1.2%と20ポイント近い差がある。

■ 考察

この文章は4段落までに「タイミング」という言葉が5回使われている。そして5段落の最初に「それでは雑草の種子は発芽のタイミングをどう計るのだろうか。」という問いの一文がある。ここまで読み取れたら、あとはその答えを探すべく7段落まで読み進めば段落ごとの中心文を見付けられる構造となっている。

上記のことが理解できれば、正答を選ぶのは難しいことではない。R3以上の通過率は65%以上であることから、この段階の生徒の多くには基本的な読む力が身に付いていると考えられる。

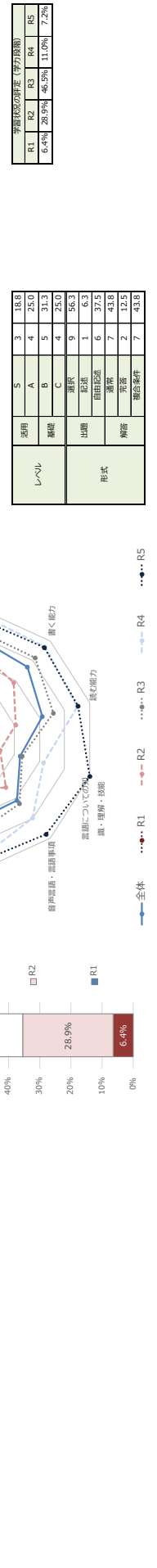
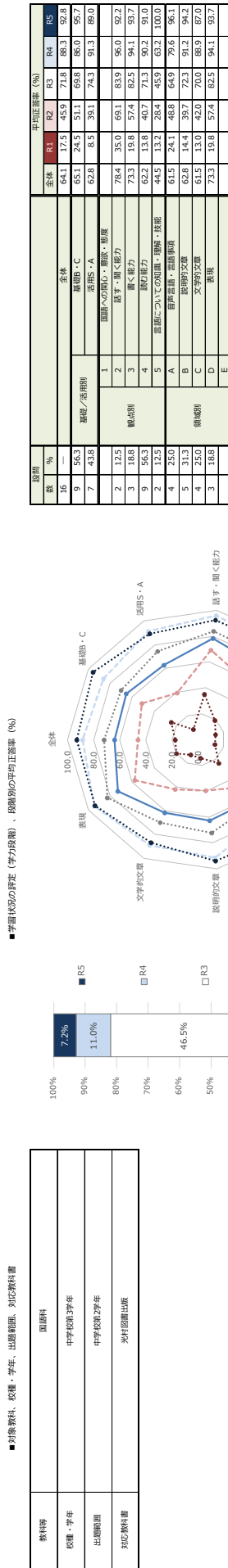
しかし、R1=14.3%という通過率をみると、「キーワードに注目する」「“問い”と“答え”の文に着目して読む」ことができていない生徒が多いと考えられる。ゆえにこの段階の生徒は、「タイミング」を計るうえで重要なのが「ギャップ」で、「ギャップ」を教えてくれるのが「光」で、「光」が入ると「発芽を開始する」という段落ごとの中心文を網羅していない選択肢、又は網羅の仕方に偏りのある選択肢を選ぶに至ったと考えられる。

■ 授業改善

- (1) 「キーワード」、「問いの文」、「答えの文」等の説明的文章を読解するうえで必要な基礎的な用語を知識として押さえ、読解スキルに関する理解が深まるよう、時間を設けて指導する。
- (2) 読解スキルを活用し、説明的文章ごとに、キーワードを丸囲みしたり問いの文や答えの文に線を引きたりして視覚化し、これらを手掛かりに要約文を作らせる。
- (3) (2)で作らせた要約文を早く書けた生徒5・6名に板書させ、書くことが難しい生徒の手掛かりとさせる。それとともに、要約文は誰が作ってもほぼ同様の文になることに気付かせ、他の文章を要約する際に意識させるとよい。

中学校第3学年

説明番号	出題		学習目標の観点										結果												
	内容	形式	設問レベル	1	2	3	4	5	A	B	C	D	E	達成率 (%)											
1	1	1	読者の感情・感情に注意して書くこと	■	●				■	■	■	■	■	67.8	32.3	58.2	70.1	92.1	85.8	0.1	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0
2	1	2	読者の感情・感情に注意し、自分の考えと比較すること	■	●				■	■	■	■	■	89.0	37.6	80.0	97.6	100.0	98.6	6.9	45.1	12.6	0.7	0.0	0.7
3	2	1	読者の感情・感情に注意し、自分の考えと比較すること	■	●				■	■	■	■	■	62.4	19.5	46.8	67.4	82.4	100.0	0.1	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0
4	2	2	読者の感情・感情に注意し、自分の考えと比較すること	■	●				■	■	■	■	■	26.7	6.8	10.1	24.5	44.1	100.0	0.8	4.5	1.3	0.2	0.0	0.0
5	3	1	読者の感情・感情に注意し、自分の考えと比較すること	■	●				■	■	■	■	■	37.7	19.5	33.9	56.9	81.9	100.0	0.5	7.9	0.0	0.0	0.0	0.0
6	3	2	読者の感情・感情に注意し、自分の考えと比較すること	■	●				■	■	■	■	■	59.0	18.8	35.7	64.8	93.4	95.1	1.0	9.0	0.8	0.3	0.0	0.0
7	3	3	読者の感情・感情に注意し、自分の考えと比較すること	■	●				■	■	■	■	■	65.6	6.8	37.6	79.3	95.2	96.6	20.2	68.4	38.4	9.6	2.2	0.0
8	3	4	読者の感情・感情に注意し、自分の考えと比較すること	■	●				■	■	■	■	■	56.9	0.8	23.2	72.1	90.3	93.9	22.7	82.0	47.3	7.4	2.6	0.0
9	3	5	読者の感情・感情に注意し、自分の考えと比較すること	■	●				■	■	■	■	■	66.1	20.3	49.2	72.3	89.0	100.0	0.9	12.0	0.3	0.0	0.0	0.0
10	4	1	登場人物の感情・感情に注意して書くこと	■	●				■	■	■	■	■	77.5	24.1	65.6	85.2	95.6	95.3	1.2	14.3	0.8	0.1	0.0	0.0
11	4	2	登場人物の感情・感情に注意して書くこと	■	●				■	■	■	■	■	67.9	3.0	15.4	42.7	81.1	62.2	20.6	68.4	37.9	10.2	1.7	5.4
12	4	3	登場人物の感情・感情に注意して書くこと	■	●				■	■	■	■	■	64.7	4.5	37.8	79.9	89.9	90.5	22.9	62.0	43.5	9.1	5.7	3.4
13	4	4	登場人物の感情・感情に注意して書くこと	■	●				■	■	■	■	■	94.3	52.6	92.6	99.0	100.0	100.0	1.8	18.0	2.0	0.2	0.0	0.0
14	5	1	登場人物の感情・感情に注意して書くこと	■	●				■	■	■	■	■	65.5	4.5	46.5	75.5	91.2	92.6	11.2	69.2	18.8	2.9	0.9	2.0
15	5	2	登場人物の感情・感情に注意して書くこと	■	●				■	■	■	■	■	60.1	2.3	33.2	73.1	91.2	88.5	21.1	60.5	37.8	9.5	3.1	4.1
16	5	3	登場人物の感情・感情に注意して書くこと	■	●				■	■	■	■	■												
17																									
18																									
19																									
20																									
21																									
22																									
23																									
24																									
25																									
26																									
27																									
28																									
29																									
30																									



説明	S	3	18.8
読解	A	4	25.0
基礎	B	5	31.3
	C	4	25.0
出題	難易	9	56.3
	出題	1	6.3
	出題	6	37.5
	出題	7	43.8
	出題	2	12.5
	出題	7	43.8

【単語の活用について理解すること 大問2 (2) 基礎C 26.7%】

次の文の線部の品詞として適切なものをあとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

・妹がきれいな花を見たがったので、一緒に植物園に行った。

(正答) ① ウ (形容動詞) ② オ (助動詞) ③ ア (動詞)

■ 結果

全体の通過率は 26.7%であり、段階別にみると R1=6.8%、R2=10.1%、R3=24.5%、R4=44.1%、R5=100%であった。他の基礎B・Cの設問と比べてR1・2の通過率が低い。さらに、R4でも半数以上が誤答である。この設問は完答で正解となるが、解答の類型は、①(形容動詞)のみの正解が1.5%、②(助動詞)のみの正解が3.5%、③(動詞)のみの正解が23.8%である。①(形容動詞)だけの誤答が28.0%である。無答率は全体で0.8%と、他の設問と比べて低いが、R1の無答率は4.5%である。R4・5に無答はない。

■ 考察

昨年度に引き続き、基礎Cにかかわらず、単語の活用に関する設問の通過率が低かった。R4以下の通過率は50%を下回り、昨年度より更に低い結果となっている。完答のため、一つでも間違えると誤答となる。そのため、より難しくなったとはいえ、単語についての基礎的な知識が身に付いていないことが分かる。R5の通過率が100%ということ考えると、基礎的な知識の定着不足は明らかである。

解答の類型を見ると、他の品詞に比べ「動詞」についての理解がある程度できているが、「形容動詞」の理解が不足していることが分かる。これは、用言の中でも「形容動詞」は他の品詞との区別が難しいからだと考えられる。また、助動詞に関しても、この調査の時点で定着が不十分な生徒がいることも予想される。

■ 授業改善

- (1) 用言(動詞・形容詞・形容動詞)と助動詞を学習する際に、「活用する単語」という共通点を意識させ、活用の仕方、接続など、相互に関連付けながら指導する。さらに、他の品詞との区別を含め、形容動詞の学習に特に注意を払うことが必要である。また、これらの学習は、中学校2学年時には終了できるようにする。
- (2) なるべく多くの練習問題に取り組み、活用の仕方や問いのパターンを覚えさせる。時間を計って解く、ペアやグループで競わせるなどの活動も取り入れていくとよい。
- (3) 既習の教材文を利用して品詞分解を行い、文の中の役割を意識させる。

【例示の効果を内容の理解に役立てること 大問3 (3) 基礎B 58.0%】

筆者が8段落で挙げた例は、文章中でどのような働きをしていますか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい

(正答) ア 日本の音曲における時間的な間は、頻繁に、また長く存在することも珍しくないが、それでも音曲が成立するものだと示している。

■ 結果

全体の通過率は 58.0%であり、R1=18.8%、R2=35.7%と、他の基礎B・Cの設問よりも通過率が低い結果となった。誤答としては、「ウ 日本の音曲における時間的な間は、自然の風景と密接な関係があり、空間的な間ともつながるものだと証明している。」が最も多く、25.7%となっている。無答率は全体で1.5%であり、R4・5に無答はなかった。

■ 考察

例示の効果を示す設問に関して、平成28年度の全体の通過率は65.3%であったにもかかわらず、今年度は60%を下回る結果となった。

昨年度の設問は「文章中でどのような効果をあげていますか。」という問い方であるのに対して、今年度の設問は「文章中でどのような働きをしていますか。」という問い方に変化している。異個体の比較であるために慎重に考察する必要があるものの、今年度は「文章中でどのような働きをしているか」という言葉を深く捉え過ぎた結果、誤答としてウを選んだ割合が多かったと考えられる。

選択肢ウは「自然の風景」や「空間的な間ともつながる」といった他の段落との繋がりを感ぜさせるような言葉が使われており、そこから8段落の「文章全体の働き」は何かと考えた場合、他の段落とのつながりのあるウが解答としてふさわしいと捉えた結果であると考えられる。

■ 授業改善

- (1) 説明文の中で、段落の役割を常に意識させる。その際単純に段落の役割を確認させるだけでなく、段落を自分たちで要約する作業や、それを発表するといった活動を通して具体的に役割を実感させることも有効である。
- (2) R1・2の生徒については、今回のような課題調査や定期調査のみならず、普段の授業内の発問においても、問題を素直に捉えることの重要性を伝えるため、個別指導を行う必要がある。また問題の意味を正確に捉えられず一人で戸惑う場面も多いと考えられるため、ペア学習やグループ活動等をねらいに合わせて積極的に取り入れ、対話したり話し合ったりしながら互いに学び合えるようにする。

4 総括：新学習指導要領を踏まえた一貫性のある国語教育

- 各校種・学年の考察においては、本調査の目的の一つである「特定の内容でのつまづき、学び残しの解消を重点とする」という考えの下、基礎的・基本的な知識及び技能（設問レベル C・B）を趣旨とする設問を中心としながら、関連する観点を取り上げ、改善方策をまとめてある。
- 他方、知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他能力（設問レベル A・S）の育成については、下記を例とし、今後の「学びの課題探究化／個別化／協同化の効果的融合」の展開を踏まえ、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。全ての学習の基盤となる言語能力を向上させるために、従前から取り組まれているように国語がその中心的役割を担い、各単元においてどんな言語能力を育てるのかを明確にした指導が求められる。例えば、他教科等における「観察・調査活動(社会科)」「算数・数学的活動(算数・数学科)」「問題解決活動(理科)」「コミュニケーション活動(外国語)」などの言語活動と関連を図り、義務教育終了段階を見据えた学習指導の改善が必要である。

表 義務教育9年間を通じた「書くこと」領域における「交流」の【系統性】

小学校			中学校		
第1・2学年	第3・4学年	第5・6学年	第1学年	第2学年	第3学年
オ 書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うこと	カ 書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。	カ 書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。	オ 書いた文章を互いに読み合い、題材の捉え方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすること。	オ 書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて意見を述べたり助言をしたりして自分の考えを拡げること。	エ 書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深めること。

- 新学習指導要領の検討過程において、中央教育審議会における教育課程部会国語ワーキンググループからも、小・中学校ともに判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることについて課題が指摘されている。平成29年度調査結果も同様である。
- 思考力・判断力・表現力等は、校種を超えた【協働】の下、義務教育9年間を通じた目標・内容の【系統性】を構造的に理解し、【連続性】を確保した言語活動を段階的・螺旋的に積み上げることで育成されていく。基礎・基本となる知識や技能もまた、そのものの反復のみならず、活用を通じてこそ確実な習得がなされる。
- 根拠や理由を明確にして自分の考えを書くためには、自分の考えと事実や理由を整理し、図やグラフ等の必要な情報と関連付けて書く力が不可欠となる。
- そのうえで、発達段階に応じた交流の目的を学習者自身が自覚し、相互に読む視点を明確にした交流活動を積み重ねることで学習方法の連続性が保たれる。こうした不断の授業改善が、「正解」を求める思考に加えて、児童・生徒が「解なき問い」へ向かう力を育むことにつながっていく。